

青森県埋蔵文化財調査報告書 第272集

櫛 引 遺 跡 Ⅱ

—東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2000年2月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第272集

櫛 引 遺 跡 Ⅱ

—東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2000年2月

青森県教育委員会

序

県南地方を流れる馬淵川・新井田川流域には、以前より縄文時代から中・近世までの遺跡が多数あることで知られております。とくに、縄文後期の八戸市風張(1)遺跡や縄文晩期の是川遺跡、さらに中世の南部氏の根城跡などは全国的にもよく知られた遺跡です。馬淵川流域にある八戸市櫛引遺跡は、このなかで、従来ほとんど注目されることがなかった遺跡でした。しかし、平成9年度に東北縦貫自動車道八戸線建設に先だて行われた発掘調査によって、約1万年前の縄文時代草創期の多縄文系土器とともに竪穴住居跡が県内ではじめて発見され、この地域の人々の歴史がこの時代にまでさかのぼることが確実になりました。この発見によって、この遺跡も一躍脚光を浴びることとなったわけです。

櫛引遺跡は、平成10年度も継続して発掘調査が行われました。調査の結果、西側の斜面地域から縄文時代の竪穴住居跡や動物をとる円形の落とし穴群のほかに、奈良時代か平安時代とみられる道路跡も検出されました。この報告書は、この平成10年度の調査成果をまとめたものです。この報告書がこの地域の歴史・文化の理解や文化財保護思想の普及に何らかの益するところがあれば幸いです。

調査の実施、報告書の作成にあたり、ご協力いただいた関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成12年2月

青森県教育委員会
教育長 佐藤 正昭

例 言

- 1 本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）建設事業に伴う、櫛引遺跡の発掘調査のうち平成10年度分の調査成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の所在地は、八戸市大字櫛引字上矢倉、岡前、館神、上町、八幡字盆田である。青森県道跡台帳番号は03150番である。
- 3 本報告書の作成は、平山明寿・小山浩平が担当し、これらに関わる遺構と遺物等の実測図作成は調査補助員及び室内作業員が行った。執筆者の氏名は文末に記してある。
- 4 資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）。
石器の石質鑑定 松山 力（八戸市文化財審議員）
- 5 地形及び地質に関しては、昨年度報告分と同様であるため、今回は報告しない。
- 6 本報告書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を複製したものである。
- 7 本報告書における用例は次のとおりである。
 - 1) 挿図中の方位は基本的に真北を示す。複数の遺構が図示される場合には各図中で方位を統一したが、そうでないものについては各々方位を示した。
 - 2) 挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。
 - 3) 遺物写真の縮尺は不統一である。
 - 4) ケバ：遺構の傾斜・落ち込みを「┆」攪乱及び削平を「≡」で示した。
 - 5) 遺物観察表の計測値で（ ）は推定値、< >は残存値を示したものである。
- 8 引用文献については巻末に収めた。
- 9 本調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・助言を頂いた。銘記して感謝申し上げます。次第である。（順不同・敬称略）。
宇部 則保、工藤 清泰、榊原 滋高、佐々木浩一、佐野 忠史、鈴木 和子、羽柴 直人、小田川哲彦、木村 高

目 次

序

例言

目次

挿図目次・写真図版目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査の経緯・経過	3
第3節 調査の方法	5
第2章 調査区内の基本層序	6
第3章 検出遺構と出土遺物	9
第1節 検出遺構	9
1 竪穴住居跡	9
2 土 坑	11
3 道路跡	31
4 その他の遺構	32
第2節 遺構外出土遺物	35
1 土 器	35
2 石 器	45
第4章 円形の落とし穴について	48
第5章 まとめ	55
写真図版	57
引用・参考文献	80
報告書抄録	81

挿 図 目 次

図1	遺跡位置	2
図2	地形及び路線	4
図3	遺跡周辺の地質・基本層序	7
図4	遺構配置	8
図5	第1号竪穴住居跡・出土遺物	10
図6	土坑(1)	13
図7	土坑(2)	17
図8	土坑(3)	19
図9	土坑(4)	23
図10	土坑(5)	25
図11	土坑(6)	29
図12	土坑(7)・出土遺物	30
図13	道路跡	33
図14	粘土跡・集石跡	34
図15	遺構外出土土器(1)	37
図16	遺構外出土土器(2)	39
図17	遺構外出土土器(3)	40
図18	遺構外出土土器(4)	41
図19	遺構外出土土器(5)	43
図20	遺構外出土土器(1)	46
図21	遺構外出土土器(2)	47
図22	柳引遺跡の落とし穴配置	49
図23	円形落とし穴の分布	51
図24	円形落とし穴の配列	53

写 真 目 次

写真1	調査区現況	58
写真2	調査区完掘状況	59
写真3	基本層序	60
写真4	作業風景	61
写真5	第1号竪穴住居跡	62
写真6	土坑(1)落とし穴	63
写真7	土坑(2)落とし穴	64
写真8	土坑(3)	65
写真9	土坑(4)	66
写真10	土坑(5)	67
写真11	土坑(6)	68
写真12	土坑(7)	69
写真13	土坑(8)	70
写真14	土坑(9)	71
写真15	土坑(10)	72
写真16	土坑(11)	73
写真17	土坑(12)	74
写真18	土坑(13)	75
写真19	道路跡	76
写真20	粘土跡・集石跡	77
写真21	住居跡・土坑・遺構外出土遺物	78
写真22	遺構外出土土器	79

第1章 調査概要

第1節 調査要項

1 調査目的

東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する櫛引遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存し、地域社会の文化財の活用に資する。

2 調査期間

平成10年4月27日から8月31日まで

3 遺跡名及び所在地

櫛引遺跡（青森県遺跡台帳番号03150）
青森県八戸市大字櫛引字上矢倉、外

4 調査対象面積

16、400平方メートル

5 調査委託者

日本道路公団東北支社

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

八戸市教育委員会

9 調査参加者

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長 (考古学)

調査協力員 巻 長悟 八戸市教育委員会教育長

調査員 七崎 修 元県立八戸北高等学校教諭 (地質学)

小林 和彦 八戸市縄文学習館主任主査兼学芸員 (考古学)

調査体制 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫

次長 成田 誠治

総務課長 成田 孝夫

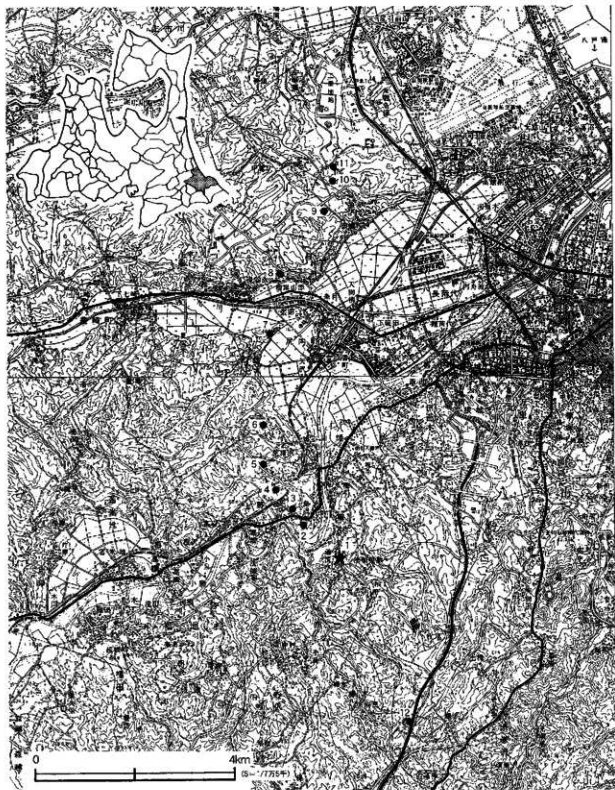
調査第二課課長 福田 友之

* 文化財保護主事 新山 隆男 (現平内町立山口小学校教諭)

* 文化財保護主事 平山 明寿、小山 浩平

* 調査補助員 佐々木一人、秋田知子、永洞佐哉子、

山口航生、杉田幸子、小山宏子、古川容子



関連遺跡一覧

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	期	年代	種類	備考
1	03140	櫻川遺跡	櫻川字上ノ島	縄文(早期・中期), 古墳, 平安	弥生前・期	包圍地	平成9・10年発掘調査(縄文・古)
2	03059	築島遺跡	櫻川字上ノ島	縄文(前・中), 弥生	包圍地		平成9年発掘調査(縄文・古)
3	03216	上野遺跡	上野字上野	縄文, 奈良, 平安	弥生前		平成11年発掘調査(縄文・古)
4	03204	上野字(3)遺跡	上野字上野 上野原	縄文, 奈良, 平安	弥生前		平成10・11年発掘調査(縄文・古)
5	03267	入野の遺跡	櫻川字入野	縄文, 平安	弥生前		平成10年発掘調査(八戸市教育)
6	03053	櫻川遺跡	櫻川字築島, 上野, 藤田, 三ツツ	縄文(早期), 平安	弥生前		平成10・11年発掘調査(縄文・古)
7	03093	赤石遺跡	櫻川町赤石	平安	弥生前		平成9・10年発掘調査(八戸市教育)
8	03303	楳原山部遺跡	栗岡町栗原山部, 栗原, 船ノ沢	縄文, 平安	弥生前		平成9年発掘調査(八戸市教育)
9	03122	赤石遺跡(3)遺跡	栗川町赤石, 赤石, 北原ノ沢	縄文(前・中), 平安	弥生前		平成9年発掘調査(八戸市教育)
10	03041	赤石遺跡(2)遺跡	栗川町赤石, 赤石, 船ノ沢	縄文(中)	弥生前		平成11年発掘調査(八戸市教育)
11	03042	船ノ沢(3)遺跡	栗川町赤石, 赤石, 船ノ沢	縄文(前・中)	弥生前		平成10・11年発掘調査(八戸市教育)
12	03121	船ノ沢(2)遺跡	栗川町赤石	縄文(早期・中), 平安	包圍地		平成10年発掘調査(八戸市教育)

図1 遺跡位置

第2節 調査の経緯・経過

調査経緯

東北縦貫自動車道八戸線は、一般国道45号（八戸久慈自動車道）に連結する八戸J.C.Tを起点とし、馬淵川とJR東北本線を跨ぎ北進し、八戸ハイテクパーク付近の八戸北ICで一般国道45号に連結する。八戸市大字櫛引から同市大字市川町までの区間、約14.8kmを結ぶ高速道路である。

東北縦貫自動車道の延伸区間は、市内の交通緩和および八戸駅西側への計画的な市街地形成のほか、既に使用している「百石道路」および「第二みちのく有料道路」に接続することにより、青森県北部に対する高速交通サービス拡大等、県内の高速交通大系を形成するうえで重要な区間となることから計画され、平成14年に全線供用を目指し建設が進められている。

この工事路線内には11遺跡が所在し、最終路線決定に伴い日本道路公団東北支社八戸工事事務所より発掘調査の委託がされた。このため路線内の埋蔵文化財の保護を図るため、日本道路公団東北支社八戸工事事務所・青森県土木部高規格道路対策室・八戸市道路建設課・青森県教育委員会・八戸市教育委員会が協議を重ね、平成7年から青森県教育委員会文化課により路線内の遺跡の踏査および試掘調査が行われ、これらの結果から、工事計画にそって発掘調査を行うことを受託した。

青森県教育委員会文化課は、更に関係機関と協議の上、11遺跡のうち昼場遺跡・人首沢遺跡・大仏遺跡・根岸山添遺跡・毛合清水（3）遺跡の5遺跡の発掘調査を八戸市教育委員会に要請し、櫛引遺跡・上野遺跡・上野平（3）遺跡・岩ノ沢平遺跡・笹ノ沢（2）遺跡・笹ノ沢（3）遺跡の6遺跡の発掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターに要請し、平成9年度から調査に着手する事となった。

調査経過

櫛引遺跡の地形は標高85mの段丘頂部に境に、西側は北西向きの急傾斜地になっており、東側は南東向きの緩やかな斜面を形成している。平成9年度は丘陵の東側28,000㎡、平成10年度は西側の急傾斜地16,400㎡の発掘調査を実施した。

平成9年度の調査において、櫛引遺跡は、縄文時代草創期から平安時代までの遺構・遺物、ほかに中・近世の遺物も出土する複合遺跡であることが判明した。調査で特筆すべき点として、遺構では、縄文時代草創期の遺物を伴う竪穴住居跡の検出、丘陵頂部に並んだ縄文時代早期に比定される13基の落とし穴の検出があげられる。また、遺物では、県内初となる縄文時代草創期に比定される多縄文系土器群の出土、縄文時代早期中葉の、物見台式・吹切沢式・烏木沢式に比定される貝殻文系土器群の出土、奈良時代の火災住居跡から出土した7世紀後葉～8世紀後葉に比定される住居跡内出土の一括資料、などがあげられる。

今年度の調査は、昨年度の成果を踏まえて、縄文時代草創期、早期の遺構・遺物の検出、土坑列の範囲確認、奈良・平安時代の集落の範囲確認などの3点を課題として、4月27日に発掘器材を搬入して調査を開始した。開始当初は前年度の試掘調査の状況を踏まえながら、調査区下方を中心に遺構・遺物の広がり、古地形を確認するためにトレンチを設定して試掘にあたった。この結果、調査区の中央と東側の部分で沢地形になっていることが判明し、深い地点では表土から遺構確認面に至るまでに2mを超すところも確認された。

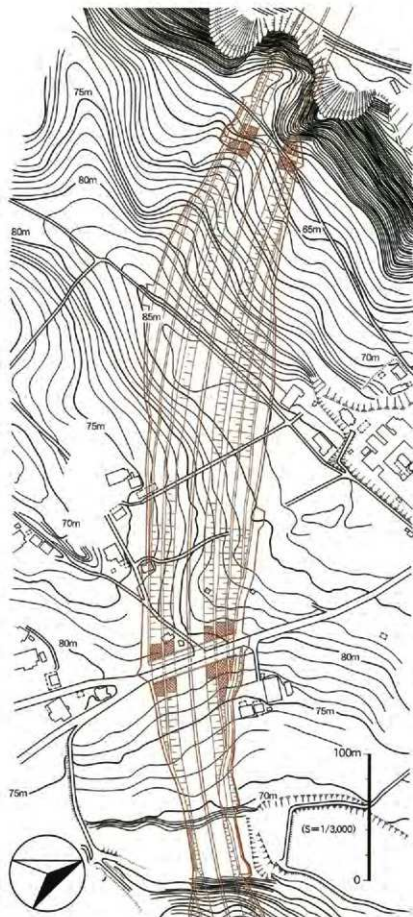


図2 地形及び路線

このため、調査では確認面まで下げる際に、厚く堆積している表土や無遺物層と確認した部分などを、重機を使用して撤去することにした。

調査は斜面の下から順次進めていったが、予想以上の土量と、調査区内における比高差が約31mに及ぶ急斜面地のため、排土置き場の選定や粗掘り作業は困難を伴った。しかし、遺構・遺物の検出数は少なく、6月上旬には調査区下部の遺構精査を終了、下旬には農道を挟んで北側の先端部の精査を終了した。7月からは調査区中央の精査に入り、下旬までに調査対象面積の80%を終了した。そこで、7月29日に委託側と調査参加者による調査打合せ会議がもたれた。この会議で柳引遺跡の調査は8月31日で終了することで一致し、その後は、平成11年度に発掘調査が予定されていた笹ノ沢(3)遺跡・上野平(3)遺跡の先行調査を行うことが決定した。8月に入ってからは調査区上部の精査を進め、8月30日までに調査対象面積の精査をすべて終了した。8月31日には次の現場への機材搬出も終了し、2年度にわたる柳引遺跡の発掘調査を完了した。

(小山)

第3節 調査の方法

調査区は馬淵川へ向かう急斜面地であり、斜面の端部で若干の平坦面となっている。この平坦面のはしから、50m近い比高差の急崖となり馬淵川に落ち込んでいる。斜面地の端部には、1本の農道が通っているが、今年度はこの平坦面を先端部、農道から標高70mまでを調査区下部、標高71mから78mまでを調査区中央部、標高79mから90mまでを調査区上部とし、調査を進めた。

調査はグリッド法を用いた分層発掘を基本とした。

グリッド設定は、公共座標値の $X=52,190$ ・ $Y=50,830$ と $X=52,190$ ・ $Y=50,790$ の2点を基準とし、1辺40mの正方形を大区画とし調査区上に割り付けた。更に、1辺20mの大グリッドに基づく 4×4 mの小グリッドを設定し、20m単位に木杭を4m単位にグリッドピンを打設した。なお、このグリッドは昨年度から連続するものである。グリッドの呼称も昨年度に引き続き、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を付し組み合わせたものにした。また、南北方向がアルファベット数を超えるため、アルファベットの頭にローマ数字のI・IIなどの数字を付け不足分を補った。

標高値は調査区近くにある2級基準点(標識番号八2K.6、H=72.077m)から大グリッド杭へ移動し用いたほか、各遺構精査の必要に応じて移動して用いた。

掘り作業は、前節でも述べたように人力と重機とをフル稼働してひたすら掘り進んだ。

遺構名は、調査時には、竪穴住居跡=S I、土坑=SK、の略号を用いた。これ以外の道路跡、粘土跡に関してはそのまま呼称した。

遺構番号は検出順に付していった。遺構精査に当たっては、規模と形状に応じて違った分割法を用い、土層観察後に掘り上げた。堆積土が遺構壁面や底面と判別し難いものについては、随時サブトレントチを設け確認した。また、粘土跡については断割を行って土層を観察した。

土層観察は、『新版標準土色帖』を用い土色とマンセル記号を併記し、特徴を注記した。層順については、遺構の堆積土には算用数字を用い、調査区全体の自然層についてはローマ数字を用いた。実測図の作成は、遺構図は1/20を基本としたが、規模や遺物出土状態などの違いに応じて任意の縮尺で作成した。遺物の取り上げは、遺構およびグリッドの層単位で行った。

写真は、35mmモノクロームネガとカラーリバーサルフィルムで撮影したほか、特徴的なものに関してはカラーネガでも撮影した。

(小山)

第2章 調査区内の基本層序

梯引遺跡は昨年度も報告されているように、大部分は、標高70～87mの天狗岱段丘の中でも低位面である野場段丘上に位置し、西側の約20%が標高約60～70mの天狗岱段丘より低位の高館段丘へかけての斜面上に位置している。これらの段丘群は主に十和田カルデラを噴出源とする数多くの火山灰層に覆われている。その中でも本遺跡は、中振浮石層（通称アワズナ）、南部浮石層（通称ゴロタ）、二ノ倉火山灰層、八戸火山灰層に覆われていることが確認された。また、遺構の覆土として、白頭山火山灰、十和田a火山灰が堆積している場合もある。

調査区内の基本層序も昨年度とほぼ同様で層序的に大きく変わるところはない。

第Ⅰ層の黒色土（10YR2/1）は表土および盛土で、調査区内の全域にわたって堆積する。盛土は、調査区内に植林をする際に、段状に整地したものとしてとらえられるもので、層厚は約10cm～90cmである。特に、標高80m～83m付近と、標高75m～77m付近に厚く盛土されている。

第Ⅱ層は調査区上部～下部と先端部で堆積の状況に違いが見られる。調査区上部～下部では、黒色土（1.7/1）に粒径1～4mmの灰白色（10YR8/2）浮石と中振浮石を混入する。また、ごく限られた部分で白頭山火山灰の細かいブロックが認められる。層厚は約20cm～40cmである。

調査区先端部では、にぶい黄褐色土（10YR5/4）に中振浮石を混入する。その他の混入物は上部～下部と同様であることから第Ⅱ層相当とした。黒色土が混入していないのは風雨の影響によるものと考えられる。層厚は約25cmで、先端部全域に堆積する。本層からは、昨年度同様に、十和田a火山灰で覆われた道路跡等が検出されたことから、古代の生活面と考えられる。

第Ⅲ層の黄褐色土（10YR5/6）は中振浮石層である。昨年度の調査において、本層は遺跡の一部にしか堆積しておらず、その他、大部分では黒褐色土に中振浮石が堆積する層ととらえていた。しかし、今年度は調査区の全域にわたり30cm～50cm程の厚さで堆積する。最も厚く堆積するのは標高78m、IIQ-104・105グリッド付近で、沢地形の最深部にあたる地点である。先端部では遺構の覆土や北東の谷など窪みのある部分に堆積する。層中から遺物は出土しない。

第Ⅳ層の黒色土（10YR2/1）～褐色土（10YR4/4）は、層中に黄褐色～明黄褐色（10YR7/8～6/8）の南部浮石粒を混入する。調査区全体に堆積するが、本層も第Ⅱ層同様、先端部では黒色土を含まず、褐色土（10YR4/4）に南部浮石を混入する。調査区上部から下部の層厚は約20cmから70cmで、最も厚く堆積するのは第Ⅲ層同様、標高78m、IIQ-104・105グリッド付近である。先端部では約20cmの厚さで堆積する。本層の層理面には起伏がある。昨年度は、本層の上位に縄文時代早期貝殻文土器の捨て場が検出されているが、今年度は検出されず、遺物の出土も少量であった。

第Ⅴ層の褐色土（10YR4/4～4/6）は層中に南部浮石粒を混入するが、第Ⅳ層に比べ少ない。下位に向かうにつれて黄色が強くなる。厚さは約50cmで層理面には起伏がある。昨年度は本層及び第Ⅵ層から縄文時代草創期の遺物が出土している。

第Ⅵ層のにぶい黄褐色～黄褐色土（10YR5/4～5/8）層は厚さが約10cm～60cmである。本層の上位層理面から縄文時代草創期の遺物が出土している。堅く締まった土で灰白色の微細な岩粒が混入する。

第Ⅶ層以下は、八戸火山灰層であり無遺物層となる。

（小山）

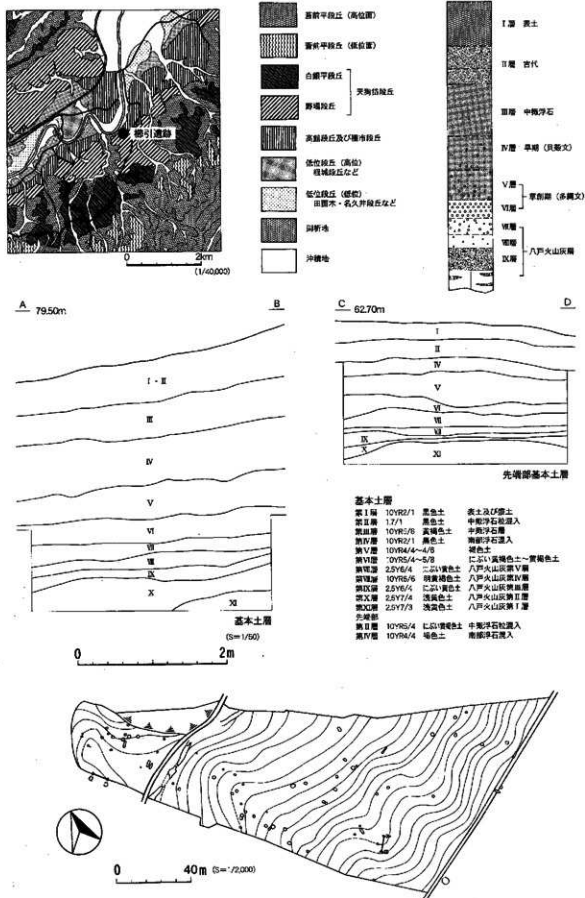


図3 遺跡周辺の地質・基本層序

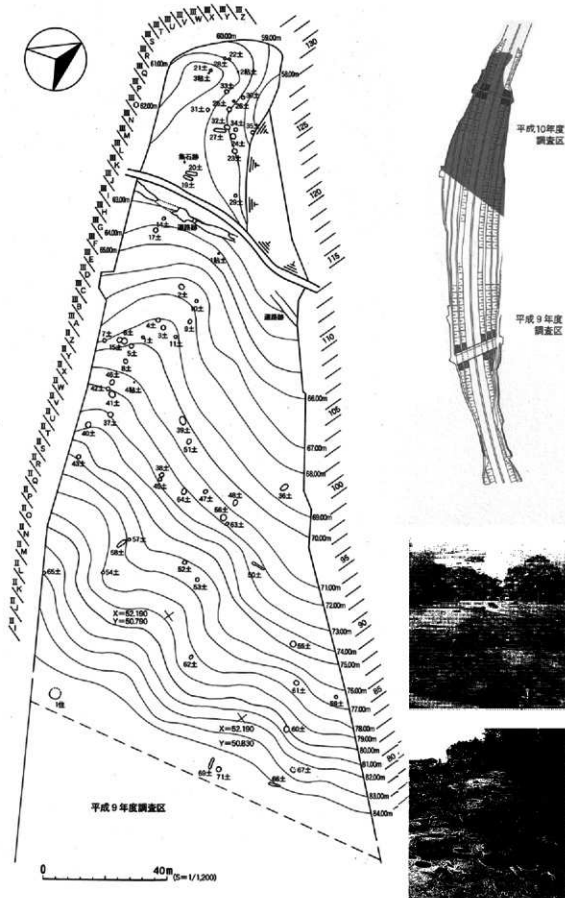


図4 遺構配置

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

平成10年度の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑63基、道路跡1条などである。

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は1軒検出された。縄文時代のものである。

第1号竪穴住居跡(図5)

〔位置・確認〕今年度調査区上部のⅡH・I-99・100グリッドに位置する。ここは標高84mの丘陵頂部にあたる。第V層上面で、遺物の出土と円形にひろがる黒褐色土として確認した。

〔平面形・規模〕削平や木の根による攪乱を受けているため北西壁は検出されなかったが、平面形はほぼ円形で、直径は約3.6mある。壁の立ち上がりは緩やかで、確認面から床面までの深さは南壁で最大になり、11cmある。壁高は、東壁で10cm、西壁で9cm、南壁で11cmあるが、北壁の立ち上がりは検出できなかった。床面積は推定で9.05㎡と小さい。

〔堆積土〕褐色土主体で2層に分層される。堆積土の混入の状況から人為堆積と考えられる。

〔床〕第V層を床面としている。床面の断面は、中央がやや窪む皿状をしている。一部に木の根による攪乱を受けたところがあるものの、全体に締まっている。

〔炉〕住居跡中央やや北西の壁寄りに石囲炉を1基確認した。傾斜面の下方に片寄って構築されている。炉の遺存状態は良い。ほぼ円形に掘られた掘り方のまわりに、扁平な河原石を10個、方形に配置している。礫の1つは少し離れた場所にあったが、炉石が崩れたものか、台として使われたものか不明である。掘り方の規模は直径66cm、深さ13cmで、炉の規模は、55cm×56cmである。また、石の大きさは最大のもので40cm×10cm×5cmある。焼土の平面形は不整形長方形で、範囲は19cm×22cm、厚さは3cmである。石はかなり被熱して、表面が脆くなっている。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔出土遺物〕炉から50cm離れた、住居跡の中央付近の堆積土中から、深鉢の破片が多数出土した。(図5-1)床面からの高さは9cmである。底部を欠損しているものの、ほぼ一體分ある。これらの破片は、直径30cmの円形の範囲にまとまっており、そのほとんどは表を上にして、破片を敷いたような状態で出土した。このような出土状況から、この土器は、住居廃絶後の窠みに廃棄されたものと思われる。この深鉢は、底部から外反しながら立ち上がり、胴部上半でくびれる器形をしている。口縁は平口縁で、口唇部は平らに整えられている。最大径は口縁部にあり、20.4cmを測る。残存高は24.6cmである。外面には単節のLR縄文を縦位に施文している。内面はナデ調整がみられるが、器面が粗いため単位はよく分からない。焼成は良好であるが、二次焼成を受けているため、器面はかなり脆い。胎土に小礫と砂が多量に混入する。土器片は、成形時の粘土接合面で割れているものが多い。割れ方を観察すると、粘土帯の高さは口縁部で約1cm、胴部で約3cmと推定される。また、底部の接合面には煤が付着していることから、この土器は、もともと底部を破損して廃棄されたものと思

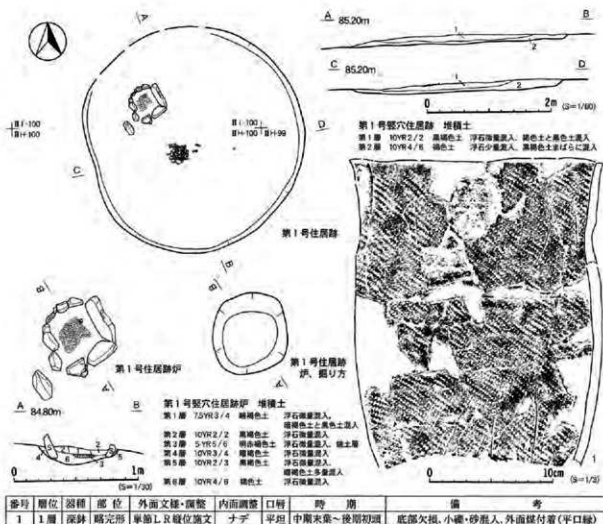


図5 第1号竪穴住居跡・出土遺物

われる。器形と施文文様から、この土器の時期は、縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

[時代] 堆積土中の遺物から、住居の廃棄年代は縄文時代中期末葉～後期初頭と思われる。

[小結] 遺物以外からも住居跡の時期を求めてみたい。この住居跡は、

①丘陵の頂部に単独で構築されている。

②炉は石囲炉である。

③炉は傾斜面の下方に偏在し、炉及び住居跡の中央を結んだ主軸線上の1/4の位置につくられる。

という特徴を持っている。まず、②炉の形態から、土器と同様に縄文時代中期末葉～後期初頭の年代が考えられる。①住居跡の立地においては、同じ八戸市内の同時代の遺跡から、中期末葉の大木10式併行期の住居跡は、丘陵の頂部に単独棟で構築され、後期初頭期になると3～6棟前後の単位にまとまって構築された可能性が指摘されている。(八戸市教育委員会：1986・1988) また、③住居跡における炉の位置が、最花式期では主軸線上の1/3の位置に、大木10式併行期では1/4、後期初頭期では1/3の位置に変遷することが指摘されている。(青森県教育委員会：1986)

柱穴や特殊施設が検出されていないため、あくまで可能性の域を出ないが、住居跡の立地や住居跡内における炉の位置から、本遺構は大木10式併行期のものである可能性が高い。(平山)

2 土坑

総数63基の土坑が検出された。本年度の調査課題として、昨年度の調査で検出された、円形の落とし穴のひろがりを確認することがあげられたが、調査では、列のひろがりを確認できず、また、新たな落とし穴の配列は検出されなかった。

検出された遺構の確認面は第V層上面が殆どである。時期的には、出土遺物から縄文時代晩期や中期末葉～後期初頭に比定されるもの、検出状況から中瀬浮石降下以前に構築されたことが確実なもの、また、火山灰の堆積状況から奈良・平安時代に比定されるものがある。しかし、その他大部分の土坑に関しては、帰属時期・用途などは不明である。これらの土坑は平面形態や断面形態で6種類に分けられる。土坑の分類基準は昨年度刊行した備引遺跡報告書にならうものとするが、本年度検出した土坑に当てはまらないD群（方形と円形の土坑が連結しているもの）は削除して記載したい。また、重複しないもの、平面形・断面形など分類基準で説明できるものは本文中の項目を削除するものとする。なお、特記事項がある場合は随時項目を設定して記載するものとする。土坑番号は調査時の検出順に付していったが、精査によって遺構と認定できないものなどは欠番とした。その上、分類に従って記述するため、遺構番号は順不同になる。

土坑の分類基準は以下の通りである。

A群：円形のもの

- I類 断面形が円筒形のもの
- II類 断面形が袋状のもの
- III類 断面形が箱形のもの
- IV類 断面が不整のもの

B群：楕円形のもの

C群：方形のもの

E群：溝状のもの

- I類 開口部短軸が1mを超えるもの
- II類 開口部が中間的な大きさのもの
- III類 開口部短軸が概ね50cm以下のもの

F群：その他の土坑

A群 平面形が円形のもの

I類 断面形が円筒形のもの（図6）

総数8基の検出である。本類は底面の小穴の有無によって二分され、さらに小穴の無いものは、中瀬浮石の堆積の有無によって細分される。しかし、本類は時期的・用途的にも大差のないものとしてとらえたい。その根拠として次のようなことがあげられる。1点目は、本類は形態的特徴のほか堆積状況において共通点が見られることである。これらは、全てが自然堆積であり、例外なく覆土の上位に基本層序第IV層相当の土が堆積する。また、2点目は、本類の土坑が昨年度に、小穴の有無に関

ならず1列に配置された状況で検出されたことである。

第30・32・35号土坑は、覆土の最上位に中振浮石がレンズ状に堆積し、さらに、その下には第IV層相当の黒色土に南部浮石を混入する層が堆積する(図6)。第IV層は縄文時代早期貝紋系土器群の包含層である。このことから、本類の構築時期は、中振浮石降下以前に掘り込まれたことは確実で、さらに、これら全てが自然堆積であることを考えあわせると、上限は縄文時代早期にまでさかのぼる可能性が高い。用途は、規則性のある配置・底面の小穴(逆茂木痕)から落とし穴としてとらえることにする。今年度は昨年度のような規則性のある配列はみられなかった。

第40号土坑(図6) AI

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるIIW-115・116グリッドに位置する。標高74m付近の緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は1.9m×1.6m、底径1.2m×1mで、深さ約1.1mである。[底面] 平坦である。また、底面から径約10cm、深さ約20cm～25cm程の小穴を8個検出した。[堆積土] 6層に分層される。第1層には第IV層相当の土が堆積しており、自然堆積と考えられる。[小結] 検出状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

第8号土坑(図6) AI

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるIIIB-118グリッドに位置する。標高70m～71mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は1.6m×1.3m、底径90cm×70cmで、深さ約90cmである。[底面] 平坦である。また、底面からは径約10cm、深さ約15cm～20cm程の小穴を6個検出した。[堆積土] 6層に分層される。第1層には第IV層相当の土が堆積しており、自然堆積と考えられる。第3層以下は堆積状況から自然堆積と考えられる。[小結] 検出状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

第54号土坑(図6) AI

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるIIQ-105・106グリッドに位置する。標高78m付近の緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は1.3m、底径1.1mで、深さ約40cmである。[底面] 平坦である。また、底面からは径約10cm、深さ約20cm～35cm程の小穴を11個検出した。この小穴は径30cm程の掘り方を持っている。[堆積土] 3層に分層される。第1層には第IV層相当の土が堆積しており、自然堆積と考えられる。[小結] 検出状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

第32号土坑(図6) AI

[位置・確認] 調査区先端部の東側にあたるIIIT-128・129グリッドに位置する。標高60mの緩斜面地に作られている。第IV層相当を精査中に中振浮石が堆積している円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は2.2m×1.7m、底径約1.3m×1mで、深さ約1.1mである。[底面] 平坦である。[堆積土] 5層に分層される。第1層には中振浮石が、第2層には基本層序第IV層相当

の土が堆積しており、自然堆積と考えられる。[小結] 逆茂木は検出されなかったが、形態及び堆積状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

第30号土坑 (図6) AI

[位置・確認] 調査区先端部の東側にあたるⅢV-130グリッドに位置する。標高59m~60mの緩斜面地に作られている。第IV層相当を精査中に中振浮石が堆積している円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.2m、底径約80cmで、深さ約1.3mである。[底面] 平坦である。[堆積土] 7層に分層される。第1層には中振浮石が、第2層には第IV層相当の土が堆積しており、自然堆積と考えられる。[小結] 逆茂木は検出されなかったが、形態及び堆積状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

第35号土坑 (図6) AI

[位置・確認] 調査区先端部の東側にあたるⅢU-127グリッドに位置する。標高58m~59mの斜面地に作られている。第IV層相当を精査中に中振浮石が堆積している円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は1.1m、底径約70cmで、深さ約1.1mである。[底面] 平坦である。[堆積土] 5層に分層される。第1層には中振浮石が、第2層には第IV層相当の土が堆積しており、自然堆積と考えられる。[小結] 逆茂木は検出されなかったが、形態及び堆積状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

第55号土坑 (図6) AI

[位置・確認] 調査区中央部の東側にあたるⅡZ-92グリッドに位置する。標高75m付近の緩斜面地に作られている。基本層序第V層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.9m、底径約1.2mで、深さ約1.1mである。[底面] 平坦である。[堆積土] 4層に分層される。第1層には第IV層相当の土が堆積しており、自然堆積と考えられる。[小結] 逆茂木は検出されなかったが、形態及び堆積状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

第61号土坑 (図6) AI

[位置・確認] 調査区中央部の東側にあたるⅡY-89グリッドに位置する。標高77m~78mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.7m×1.3m、底径約1.2m×90cmで、深さ約70cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 2層に分層される。第1層には第IV層相当の土が堆積し、自然堆積と考えられる。[小結] 逆茂木は検出されなかったが、形態及び堆積状況から縄文時代早期に比定される落とし穴と考えられる。

II類 断面形が袋状のもの (図7)

本類は総数7基の検出である。遺物が出土しないことから構築時期・用途に関しては不明である。また、配列に関しても特徴的なものは検出されなかった。

第3号土坑（図7） A II

〔位置・確認〕 調査区中央部の西側にあたるⅢF・ⅢG-118・119グリッドに位置する。標高69m～70mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。

〔規模〕 検出面での開口部径は1.6m、底径1.7m×1.5mで、深さ約1.6mである。〔底面〕 中央付近が若干深く掘り込まれており、中央に径約40cm、深さ約10cmの円形の小穴がある。〔堆積土〕 14層に分層される。下半部及び上半部の層内に炭化物・焼土を混入しており、人為堆積の状況をしめす。

第60号土坑（図7） A II

〔位置・確認〕 調査区上部の東側にあたるⅡV-87グリッドに位置する。標高80m付近の平坦地に作られている。第V層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.8m、底径約2mで、深さ50cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 3層に分層される。黒色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第7号土坑（図7） A II

〔位置・確認〕 調査区中央部の西側にあたるⅢB-120グリッドに位置する。標高69m付近の緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は1.5m、底径1.7mで、深さは1番深い南側で約80cmである。〔底面〕 平坦である。

〔堆積土〕 4層に分層される。全層に炭化物を混入する。

第5号土坑（図7） A II

〔位置・確認〕 調査区中央部の西側にあたるⅢC・ⅢD-119グリッドに位置する。標高70m付近の緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に褐色土と黄褐色土の混在する円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は1.3m、底径1.5mで、深さ約80cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 8層に分層される。第1・2層はローム主体の土が堆積しており、土坑に蓋をしたものと考えられる。第3層以下も堆積状況から人為堆積と考えられる。

第15号土坑（図7） A II

〔位置・確認〕 調査区中央部の西側にあたるⅢC-120グリッドに位置する。標高69m～70mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.8m、底径約1.9mで、深さは1番深い南側で約1mである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 11層に分層される。堆積状況から人為堆積と考えられる。

第53号土坑（図7） A II

〔位置・確認〕 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅡW-100・101グリッドに位置する。標高76m～77mの平坦地に作られている。第V層上面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.3m、底径約1.4mで、深さ70cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 暗褐色土の単層で、人為堆積と考えられる。

第4号土坑(図7) AⅡ

〔位置・確認〕調査区中央部の西側にあたるⅢF・G-119グリッドに位置する。標高69m~70mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕検出面での開口部径は1.2m、底径1.3mで、深さ約65cmである。〔底面〕平坦である。〔堆積土〕2層に分層される。第2層には炭化物・粘土が混入しており、堆積状況から人為堆積と考えられる。

Ⅲ類 断面形が箱形のもの(図7~10)

本類は32基の検出で今年度の主体を占める類である。本類は、断面形が箱形のものとしているが、確認面からの深さは、浅いものから深いものまで含めて本類に分類した。また、B類の楕円形と中間型のものも本類に分類した。時間的には、第26・46号土坑から遺物が、第21・22号土坑から白頭山火山灰が検出されており、構築年代を推定することができるが、他は不明である。また、用途に関しても不明である。規模においてもまともは見られず、規則的な配列も見られない。

第1号土坑(図7) AⅢ

〔位置・確認〕調査区中央部の西側にあたるⅢE-119グリッドに位置する。標高69m~70mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕検出面での開口部径は1.2m、底径1mで、深さは1番深い南側で約65cmである。〔底面〕平坦である。〔堆積土〕4層に分層される。暗褐色土~黒褐色土主体の層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第26号土坑(図7) AⅢ

〔位置・確認〕調査区先端部の東側にあたるⅢU・V-130グリッドに位置する。標高60mの平坦地に作られている。第Ⅱ層相当の面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕検出面での開口部径は約1m、底径約80cmで、深さ約60cmである。〔底面〕平坦である。〔堆積土〕3層に分層される。第2層は粘土層であり廃棄されたものと考えられる。また、遺物もこの層から出土している。〔出土遺物〕第2層中より縄文時代晩期の大洞A式と思われる浅鉢が出土している。〔小結〕覆土内の遺物から、縄文時代晩期後葉の遺構と考えられる。

第28号土坑(図7) AⅢ

〔位置・確認〕調査区先端部の北側にあたるⅢW-133グリッドに位置する。標高61mの平坦地に作られている。第Ⅱ層相当の面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕検出面での開口部径は1m、底径80cmで、深さ約70cmである。〔底面〕平坦である。〔堆積土〕3層に分層される。にぶい黄褐色土が主体の層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第21号土坑(図8) AⅢ

〔位置・確認〕調査区先端部の北側にあたるⅢU-133グリッドに位置する。標高62mの平坦地に作られている。第Ⅱ層相当の面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕検出面での開口部径は約1.1m、底径約90cmで、深さは約30cmである。〔底面〕底面は平坦である。〔堆積土〕

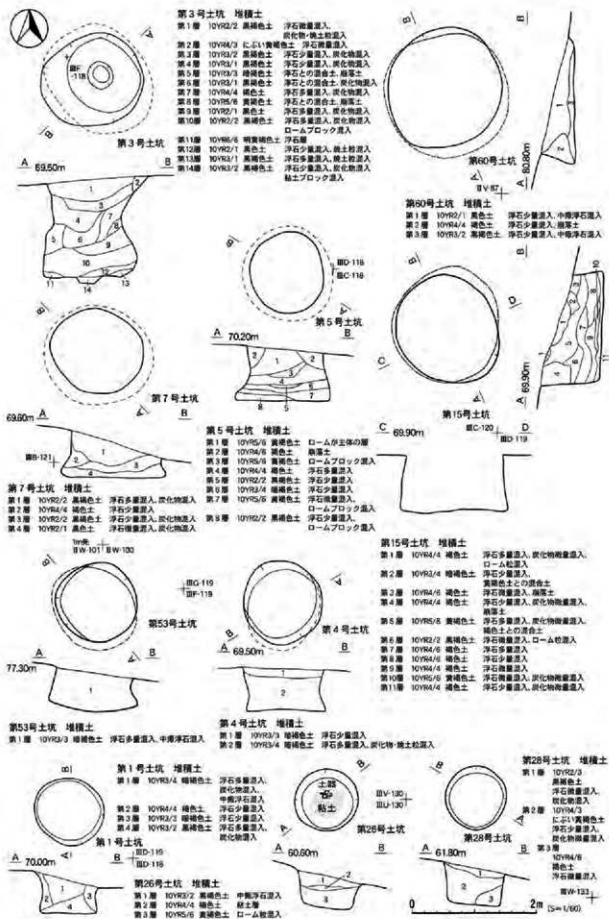


図7 土坑 (2)

2層に分層される。第1層中には白頭山火山灰が30cm×25cmの不整形に堆積している。堆積状況から自然堆積と考えられる。[小結] 白頭山火山灰の堆積により、10世紀前半には完全に埋まりきっていたものと考えられる。

第22号土坑 (図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区先端部の北側にあたるⅢW-133グリッドに位置する。標高約61mの平坦地に作られている。第Ⅱ層相当の面を精査中に褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.1m、底径約90cmで、深さ約30cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 3層に分層される。第2層中には白頭山火山灰が35cm×45cmの不整形に堆積している。堆積状況から自然堆積と考えられる。[小結] 第2層中に白頭山火山灰が堆積することから、本土坑は埋没過程の比較的早い段階で火山灰が堆積したのと考えられる。

第57号土坑 (図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるⅡT-106グリッドに位置する。標高77m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約90cm、底径約80cmで、深さ20cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第14号土坑 (図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区下部の西側にあたるⅢK・L-125・126グリッドに位置する。標高64m～65mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.2m、底径1mで、深さ約35cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、中振淨石が混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第29号土坑 (図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区先端部の農道寄りにあたるⅢQ-124グリッドに位置する。標高60mの緩斜面地に作られている。第Ⅳ層相当の面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1m、底径90cmで、深さ50cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第59号土坑 (図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の東側にあたるⅢA-86・87グリッドに位置する。標高76m～77m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.1m、底径約90cmで、深さ約40cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

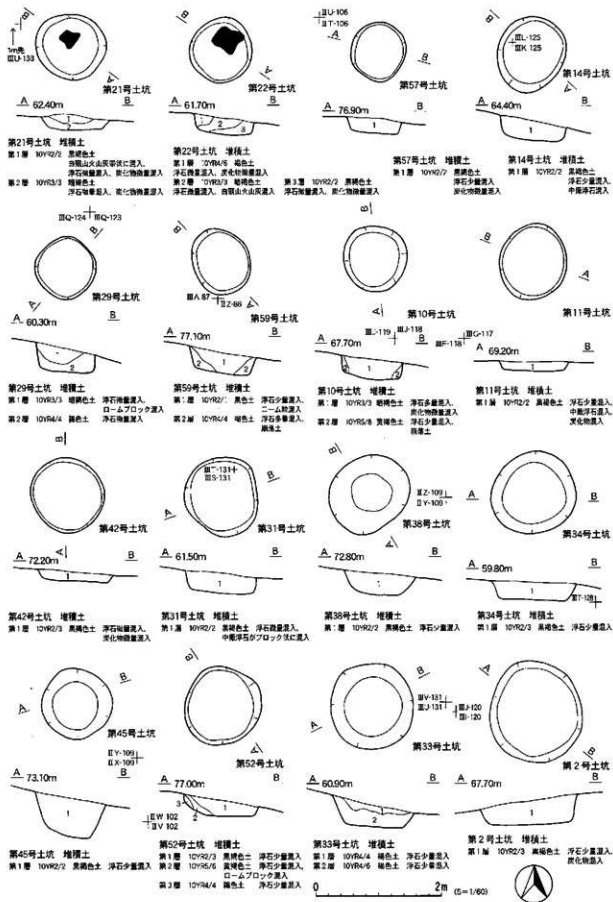


図8 土坑 (3)

第10号土坑(図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区下部のほぼ中央にあたるⅢJ-118・119グリッドに位置する。標高67m～68mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1m、底径85cmで、深さ約40cmである。[底面] ほぼ平坦である。[堆積土] 2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。第2層は壁の崩落土と考えられる。

第11号土坑(図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるⅢG-117グリッドに位置する。標高69m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は1.2m、底径1mで、深さ約15cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、層中に炭化物と中振浮石を混入する。

第42号土坑(図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるⅡZ-117グリッドに位置する。標高72m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.2m、底径約1.1mで、深さ約20cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第31号土坑(図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区先端部のほぼ中央にあたるⅢS・T-130・131グリッドに位置する。標高60m～61mの平坦地に作られている。第Ⅳ層相当の面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は1.3m、底径1.1mで、深さ30cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第38号土坑(図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅡY・Z-109グリッドに位置する。標高72m～73mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.3m×1.1m、底径約60cmで、深さ約30cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第34号土坑(図8) AⅢ

[位置・確認] 調査区先端部の東側にあたるⅢT-128グリッドに位置する。標高59m～60mの緩斜面地に作られている。第Ⅳ層相当の面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は1.4m、底径1mで、深さ約30cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第45号土坑 (図8) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅡY-109グリッドに位置する。標高72m～73mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.2m、底径約70cmで、深さ約60cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第52号土坑 (図8) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅡW-102グリッドに位置する。標高76m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.2m、底径約1.1mで、深さ約30cmである。〔底面〕 ほぼ平坦である。〔堆積土〕 黒褐色土を主体として3層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第33号土坑 (図8) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区先端部のほぼ中央にあたるⅢU・Ⅴ-131グリッドに位置する。標高60m～61mの平坦地に作られている。第Ⅳ層相当の面を精査中に褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は1.4m、底径1mで、深さ約50cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 褐色土を主体として2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第2号土坑 (図8) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区下部の西側にあたるⅢI・ⅢJ-120グリッドに位置する。標高67m～68mの斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は1.6m、底径1.4mで、深さ約35cmである。〔底面〕 やや起伏がある。〔堆積土〕 黒褐色土の単層で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第17号土坑 (図9) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区下部の西側にあたるⅢJ・K-125グリッドに位置する。標高64m～65mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.8m、底径約1.4mで、深さ約35cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 褐色土の単層で、層中に炭化物を混入する。

第37号土坑 (図9) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区中央部の西側にあたるⅡY-115グリッドに位置する。標高73mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.8m×1.6m、底径約1.4m×1.1mで、深さ約45cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 3層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第56号土坑(図9) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅢA・B-103・104グリッドに位置する。標高72m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。

[規模] 検出面での開口部径は約1.9m、底径約1.6mで、深さ約50cmである。[底面] ほぼ平坦である。[堆積土] 2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第51号土坑(図9) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の東側にあたるⅢC-110グリッドに位置する。標高77m~78mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約2m×1.7m、底径約1m×60cmで、深さ約65cmである。[底面] ほぼ平坦である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第41号土坑(図9) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるⅡZ-116・117グリッドに位置する。標高72m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約2.2m×2.0m、底径約1.3m×1.2mで、深さ約60cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 5層に分層される。堆積状況から第1層と第5層は自然堆積であり、第2・3層は人為的に埋め戻されたものとする。

第64号土坑(図9) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅡZ-107グリッドに位置する。標高72m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約2.2m×1.6m、底径約1.5m×90cmで、深さ80cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 4層に分層される。黒色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第6号土坑(図9) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるⅢC-119・120グリッドに位置する。標高69m~70mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約2.3m、底径1.6mで、深さ約1.1mである。[底面] 平坦である。[堆積土] 8層に分層される。暗褐色土が主体の層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第43号土坑(図9) AⅢ

[位置・確認] 調査区中央部の西側にあたるⅡU-114グリッドに位置する。標高76m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約1.5m、底径約1.3mで、深さ約80cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 3層に分層される。黒褐色土が主体の層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

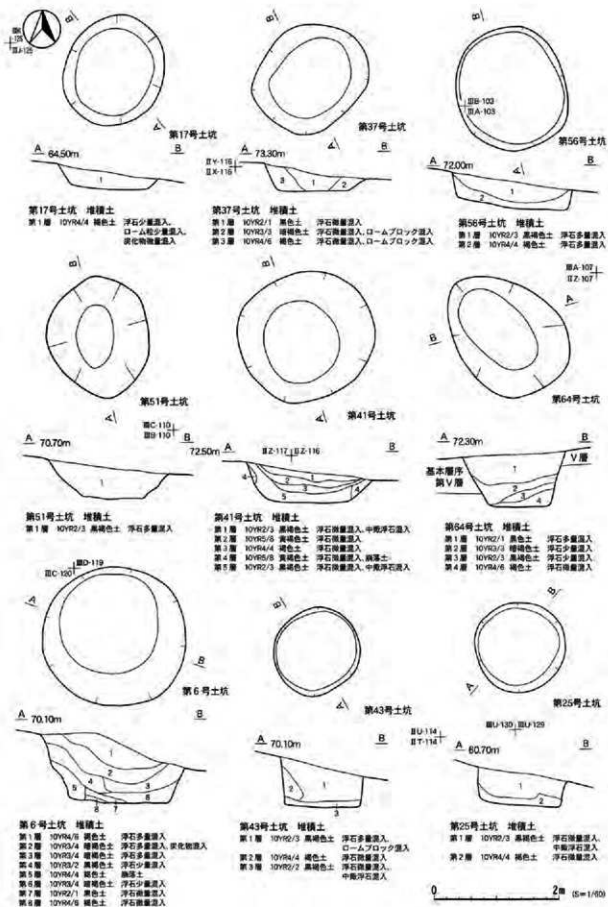


図9 土坑(4)

第25号土坑 (図9) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区先端部の東側にあたるⅢU-129・130グリッドに位置する。標高60mの平坦地に作られている。第Ⅱ層相当の面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は1.4m、底径1.2mで、深さ60cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第67号土坑 (図10) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区上部の東側にあたるⅡT・U-84グリッドに位置する。標高82m～83m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 本遺構の北壁は検出されず、検出面で残存する開口部径は約1.7m、底径約1.6mで、深さ20cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 黒褐色土の単層で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第9号土坑 (図10) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区下部の西側にあたるⅢH・ⅢI-117・118グリッドに位置する。標高68m～69mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は1.2m×80cm、底径1m×70cmで、深さ約40cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 3層に分層される。黒褐色土が主体の層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第65号土坑 (図10) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区上部の西側にあたるⅡM-108グリッドに位置する。標高82m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.2m×90cm、底径約95cm×70cmで、深さ45cmである。〔底面〕 起伏がある。〔堆積土〕 暗褐色土の単層で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第62号土坑 (図10) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区上部のほぼ中央にあたるⅡS-96グリッドに位置する。標高78m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.4m×1m、底径約1.2m×90cmで、深さ約30cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第63号土坑 (図10) AⅢ

〔位置・確認〕 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅢA・B-103グリッドに位置する。標高72m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の楕円形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約1.6m×90cm、底径約1.5m×75cmで、深さ約30cmである。〔底面〕 平坦である。〔堆積土〕 黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

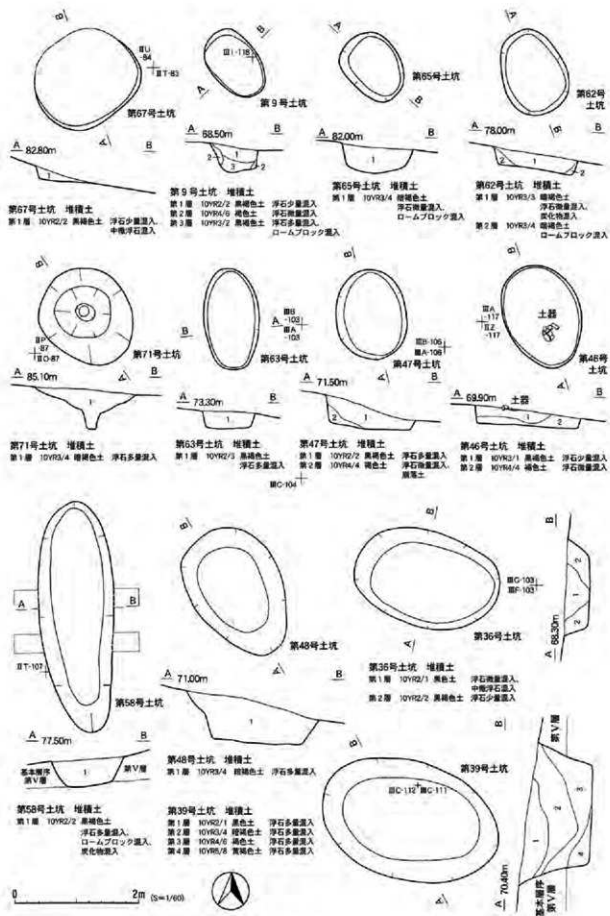


図10 土坑 (5)

第47号土坑 (図10) AⅢ

【位置・確認】調査区中央部のほぼ中央にあたるⅢA・B-106グリッドに位置する。標高71m～72mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。【規模】検出面での開口部径は約1.4m×1.1m、底径約1.3m×90cmで、深さ約50cmである。【底面】平坦である。【堆積土】2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第46号土坑 (図10) AⅢ

【位置・確認】調査区中央部の西側にあたるⅡZ・ⅢA-117グリッドに位置する。標高71m～72mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の円形プランとして確認した。【規模】検出面での開口部径は約1.7m×1.2m、底径約1.6m×1.1mで、深さ約30cmである。【底面】平坦である。【堆積土】2層に分層される。【出土遺物・小結】第1層上面から縄文時代中期末葉～後期初頭の破片が数点出土している。このことから本遺構は、この土器の年代より前に使用されたものと考えられる。

Ⅳ類 断面形が不整なもの (図10)

本類は1基の検出である。

第71号土坑 (図10) AⅣ

【位置・確認】調査区上部のほぼ中央にあたるⅡO・P-87グリッドに位置する。標高84m～85m付近の平坦地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に暗褐色土の円形プランとして確認した。【規模】検出面での開口部径は約1.6m×1.4m、底径約90cmで、深さ約30cmである。【底面】起伏があり、中央に径30cm、深さ25cmの小穴を持つ。【堆積土】暗褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

B群 楕円形のもの (図10)

本類は4基の検出である。遺物などは出土しておらず構築時期・用途などは不明である。また、規模にもまとまりは見られず、規則的な配列は見られない。

第58号土坑 (図10) B

【位置・確認】調査区中央部の西側にあたるⅡS・T-106グリッドに位置する。標高77m付近の緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の楕円形プランとして確認した。【規模】検出面での開口部径は約3.7m×1.2m、底径約3.2m×80cmで、深さ約40cmである。【底面】平坦である。【堆積土】黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第48号土坑 (図10) B

【位置・確認】調査区中央部のほぼ中央にあたるⅢC-104グリッドに位置する。標高70m～71mの緩斜面地に作られている。第Ⅴ層上面を精査中に暗褐色土の楕円形プランとして確認した。【規模】検出面での開口部径は約2.2m×1.5m、底径約1.5m×1mで、深さ約70cmである。【底面】平

坦である。[堆積土] 暗褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。

第36号土坑 (図10) B

[位置・確認] 調査区中央部の東側にあたるⅢF・G-103グリッドに位置する。標高68m~69mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒色土の楕円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約2.4m×1.5m、底径約2m×1.2mで、深さ約40cmである。[底面] 平坦である。[堆積土] 2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第39号土坑 (図10) B

[位置・確認] 調査区中央部のほぼ中央にあたるⅢC・D-111・112グリッドに位置する。標高70m~71mの緩斜面地に作られている。第V層上面を精査中に黒色土の楕円形プランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約2.9m×1.9m、底径約2.3m×1.8mで、深さ約1.1mである。[底面] 平坦である。[堆積土] 4層に分層される。暗褐色土が主体の層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

E群 溝状のもの (図11・12)

本類は6基の検出である。昨年度分類基準に照らし合わせると、開口部短軸が1mを越す大型のものは1基しか当てはまらない。しかし、これは開口部短軸が1.1mと1mをわずかに超える程度であり、長軸の長さも3.8mと、他の土坑と比して際だった違いは見られない。基準上はI類にしたものの、実際の用途は、他のE群の土坑と大差がないものと推定される。時間的には遺物や切り合い関係がないことから不明である。また、配列には規則性がなく、唯一、第19号土坑と第20号土坑が隣接して検出されたのみである。

第66号土坑 (図11) EⅢ

[位置・確認] 調査区上部ほぼ中央にあたるⅡR・S-83・84グリッドに位置する。標高84m付近の平坦地に作られている。第V層上面を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約3.6m×50cm、底径約3.5m×25cmで、深さ約80cmである。[断面形・底面] 断面形は箱形で、底面は若干起伏がある。[堆積土] 4層に分層される。黒褐色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第69号土坑 (図11) EⅡ

[位置・確認] 調査区上部ほぼ中央にあたるⅡO・P-88グリッドに位置する。標高84m~85m付近の平坦地に作られている。第V層上面を精査中に黒褐色土の細長いプランとして確認した。[規模] 検出面での開口部径は約3.5m×75cm、底径約3.4m×30cmで、深さ約1mである。[断面形・底面] 断面形は箱形で、底面は若干起伏がある。[堆積土] 5層に分層される。黒褐色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第19号土坑 (図11) EⅡ

〔位置・確認〕 調査区先端部の農道寄りにあたるⅢO-127グリッドに位置する。標高61mの平坦地に作られている。第Ⅳ層相当の面を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約3.1m×75cm、底径約4m×25cmで、深さ約1.5mである。〔断面形・底面〕 長軸上の断面形は両端ともに袋状に張り出している。底面はほぼ平坦である。〔堆積土〕 4層に分層される。暗褐色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第27号土坑 (図11) EⅡ

〔位置・確認〕 調査区先端部のほぼ中央にあたるⅢS-128・129グリッドに位置する。標高60m～61mの平坦地に作られている。第Ⅲ層相当の面を精査中に黒褐色土の細長いプランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約4m×1m、底径約3.4m×20cmで、深さ約1.5mである。〔断面形・底面〕 断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。〔堆積土〕 5層に分層される。黒褐色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第20号土坑 (図11) EⅠ

〔位置・確認〕 調査区先端部の農道寄りにあたるⅢO・P-127グリッドに位置する。標高61mの平坦地に作られている。第Ⅳ層相当の面を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約3.8m×1.1m、底径約4.6m×40cmで、深さ約1.8mである。〔断面形・底面〕 長軸上の断面形は両端ともに袋状に張り出している。底面はほぼ平坦である。〔堆積土〕 5層に分層される。黒色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

第50号土坑 (図12) EⅡ

〔位置・確認〕 調査区中央部の東側にあたるⅢA・B-98・99グリッドに位置する。標高72m～73mの斜面地に作られている。第Ⅳ層相当の面を精査中に黒褐色土の細長いプランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部径は約4.5m×60cm、底径約4.6m×15cmで、深さ約90cmである。〔断面形・底面〕 長軸上の断面形は西側が袋状に張り出している。底面は若干起伏がある。〔堆積土〕 3層に分層される。黒褐色土を主体とする層構成で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

C群 方形のもの (図12)

本群は2基の検出である。本群も遺物が出土しないことから構築時期に関しては不確定である。検出面が先端部の第Ⅱ層上面であること、本形態が昨年度の報告で、奈良・平安時代に比定されることから、古代に比定される可能性が高い。

第23号土坑 (図12) C

〔位置・確認〕 調査区先端部の東側にあたるⅢS-126・127グリッドに位置する。標高60mの平坦地に作られている。第Ⅱ層相当の面を精査中に暗褐色土の方形プランとして確認した。〔規模〕 検出面での開口部は約1.5m×1.4m、底部約1.3m×1.2mで、深さ約60cmである。〔底面〕 平坦であ

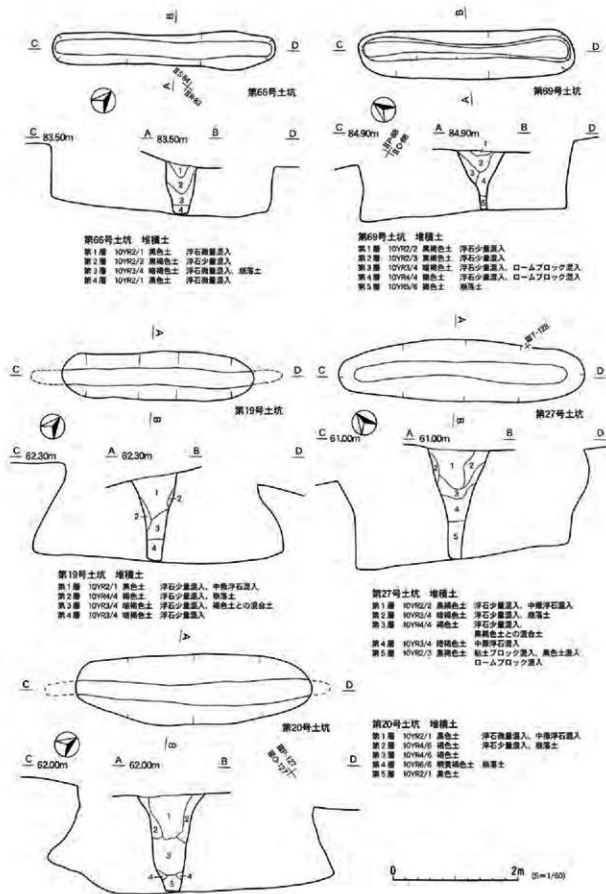


図11 土坑 (6)

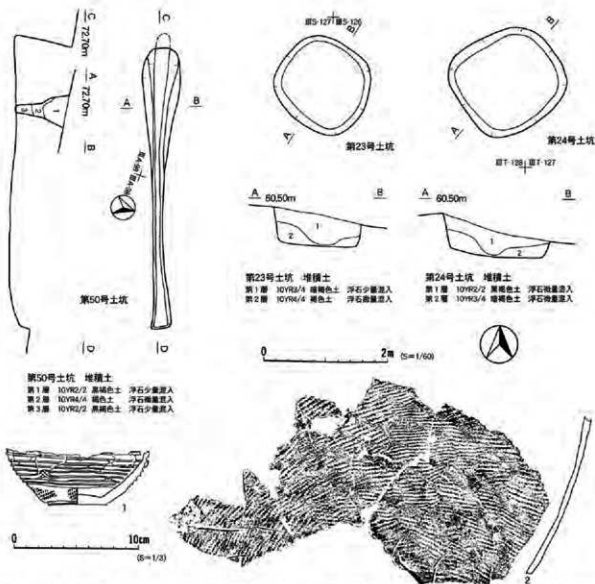


図12 土坑(7)・出土遺物

る。〔堆積土〕2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。

第24号土坑(図12) C

〔位置・確認〕調査区先端部の東側にあたるⅢT-127・128グリッドに位置する。標高59m～60mの緩斜面地に作られている。第Ⅱ層相当の面を精査中に黒褐色土の方形プランとして確認した。

〔規模〕検出面での開口部は約1.7m×1.6m、底部約1.5m×1.4mで、深さ約70cmである。〔底面〕平坦である。〔堆積土〕2層に分層される。堆積状況から自然堆積と考えられる。(小山)

3 道路跡 (図13)

[位置・確認] 調査区下部やや北寄りの、標高62m～63mのⅢO-113～ⅢP-115グリッドと、ⅢO-121～ⅢK-129グリッドに位置する。ここは、北～東側に傾斜する緩い傾斜地である。

調査区東端では第Ⅴ層で火山灰の広がりによって、また、調査区西端では帯状に拡がる黒褐色土のプランとして確認した。

調査区東端と、中央から西側の部分しか検出されなかったが、調査区の間端を結ぶように、ほぼ東西の方向に延びている。調査区西端では、植林による根の攪乱を受け、検出できなかった箇所や平面が不整な箇所がある。また、調査区東側では第Ⅰ層～第Ⅱ層で検出されたが、西側では第Ⅴ層での検出である。これは、斜面地の下面である調査区東側では黒色土(基本層序第Ⅰ層～第Ⅲ層)や火山灰が堆積しやすかったのに対し、西側は傾斜の上面にあたるため、黒色土の堆積が少なかったためであると思われる。

断面観察により火山灰層の下から硬化面が検出されたことと、現行の農道と規模がほぼ同じで、これと平行に延びていることから、道路跡と判断した。

[平面形・規模] 調査区東側では約10m、西側では約36mの長さにわたって帯状に検出された。調査区中央付近では検出されなかったが、本来は農道に平行して調査区の東端から西端まで延びていたものと思われる。西端での幅は228cm～316cmで、東端で検出された硬化面の幅は178cm～234cmある。

[堆積土] 5層に分層される。

第Ⅰ層は白頭山火山灰、第Ⅲ層は十和田a火山灰が主体の層である。この火山灰層は、調査区の間端のみで検出された。これは、前述のように北～東に向かって傾斜する緩傾斜地であるため、調査区の間端に火山灰が堆積しやすかったためと思われる。これらの火山灰は、その濃度に濃淡がみられることから、火山灰は流水などによって二次堆積したものと考えられる。白頭山火山灰の堆積した範囲は狭く、長さ約5.5mにわたってブロック状に点在する。幅は最大でも73cm、厚さは9cmである。十和田a火山灰は硬化面の直上に帯状にひろがって堆積しており、その長さは10mにも及ぶ。幅は最大で183cm、厚さは11cmである。なお、白頭山火山灰層と十和田a火山灰層の間には黒色土が挟まれている。

断面観察では、火山灰の堆積状況と硬化面の検出のため、基本層序を浮石の混入量によって細分している。しかし、硬化面は火山灰層の直下からは確認できたが、土色の関係から平面での検出は難しく、火山灰が堆積していない調査区中央付近では検出できなかった。また、検出面も黒色土のため、本来あったとみられる半円状の窪みを検出できなかった。なお、硬化面の断面は中央が厚いレンズ状に観察され、厚さは8cmである。

調査区西端では、黒褐色土を主体とする2層に分層された。しかし、植林による杉の根が多く残り、一部攪乱されて平面形が崩れたり削平された箇所もある。検出面からの深さも17cm～36cmと一定ではない。壁は緩やかに立ち上がり、半円状の断面形状をしている。調査区西端では硬化面は検出されなかった。

これらの堆積土は、自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[時代] 火山灰の堆積から、十和田 a 火山灰が降下した 10 世紀初頭に廃絶したものと思われ、それ以前の奈良～平安時代に利用されていたものと考えたい。農道と平行し、規模もほぼ同じである。また、調査区西端の調査区外には、半円状の窪みが道路跡の延長上に延びて農道に続いていることから、この地点は、古代から道路としての利用がされていたものと思われる。平成 9 年度調査区でも県道に平行して同時期と思われる道路跡が検出されていることもあわせ、この地域は古代には道路が存在し、現在もほぼそれに沿って利用されていることが明らかになった。

なお、この農道は県道から馬淵川と平行して延びている。周辺では古代の遺構が検出されなかったため、道路の先に遺構の存在が期待されたが、草が繁茂して通れなかったため、どこまで延びているのか不明である。

4 その他の遺構

竪穴住居跡、土坑、道路跡の他に、粘土跡 4 基と集石跡が 1 基検出された。

粘土跡 (図 14)

ここでは、粘土が埋められたピット状の遺構を粘土跡と仮称する。4 基が検出された。調査区中央部西端～先端部の緩傾斜地に構築されている。付属施設はなく、掘り方いっぱい粘土のみを詰め込んでいる。検出面はほとんどが第 V 層である。上位の第 I 層～第 IV 層中には粘土の混入はみられないことから、他所から持ち込まれた粘土を人為的に埋めたものと考えられる。

遺物は出土していないため、年代は不明である。また、具体的な用途は不明であるが、土器製作のための一時貯蔵的な施設と考えられる。なお、第 2 号粘土跡は確認のみに留めている。

第 1 号粘土跡

[位置・確認] 調査区下部北寄り、標高 64 m の北面する緩傾斜地である III M・N-121 グリッドに位置する。第 II 層中から、円形にひろがる粘土のプランとして確認した。断面観察のためトレンチを入れたため、西側半分の平面形は推定である。[平面形・規模] 平面形は菱形をしている。規模は短軸が残存長で 31 cm × 長軸 56 cm で、一辺は約 35 cm である。ボール状に窪む底面をもち、壁はやや直立気味に立ち上がる。粘土の厚さは 24 cm ある。粘土跡のなかで最大規模のものである。

第 2 号粘土跡

[位置・確認] 調査区先端部の緩傾斜地、標高 61 m の III W-131・132 グリッドに位置する。西に 5 m 離れて第 22 号土坑が位置している。第 V 層上面から、円形にひろがるプランによって確認した。[平面形・規模] 卵形に近い円形の平面形である。規模は短軸 26 cm × 長軸 33 cm で、直径 30 cm の円の中にほぼ収まる。

第 3 号粘土跡

[位置・確認] 調査区先端部の北面した緩斜面に位置する。標高 62 m の III U-133 グリッドに位置する。北に 1 m 離れて第 21 号土坑がある。

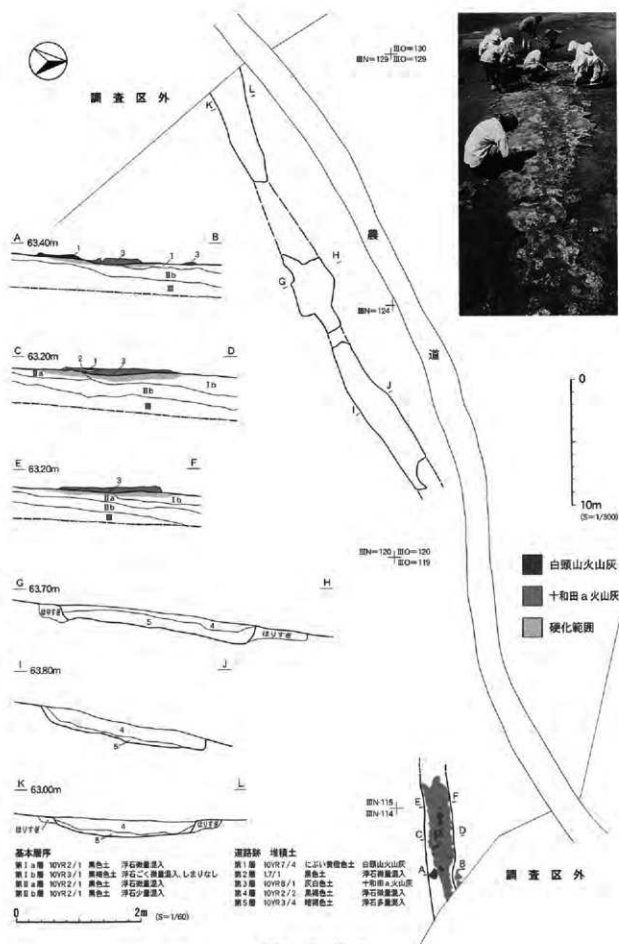




図14 粘土跡・集石跡

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は短軸27cm×長軸30cmで、直径30cmの円に収まる。壁は、東壁は緩やかに、西壁はやや直立気味に立ち上がっている。底面にはやや凹凸がみられる。粘土の厚さは7cmある。

第4号粘土跡

[位置・確認] 調査区中央部やや西寄りの緩斜地、標高は71mのⅢC-116グリッドで、第V層上面でまばらにひろがるプランにより確認した。西に8m離れて第46号土坑が位置している。

[平面形・規模] 不整形円形を主体とした平面形の粘土ブロックが4個、直径28cmの円の中にまとまっている。規模は最大のもので短軸13cm×長軸19cm、厚さは3cmある。

第1号集石跡 (図14)

[位置・確認] 調査区先端部の平坦地、標高61mのⅢO・P-128グリッドに位置する。東に3m離れて第20号土坑が位置している。検出面は第V層である。

自然堆積層である第I層～第V層には礫の混入がみられないため、人為的に集められたものと考えられる。

[平面形・規模] 直径40cmの円の中に21個の礫がまとまっている。掘り方は確認されなかった。礫の大きさは12cm×6cm×6cm程度のもものが多く、一部は2段に積み重ねられ、高さが12cm～15cmとなる。

[小結] 礫は表面が赤化し、ひび割れていることから、被熱していることが分かる。

炉や焼き石といった用途が考えられるが、周辺から焼土は確認されなかったため、その使用期間や頻度はきわめて短かったものと思われる。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

(平山)

第2節 遺構外出土遺物

1 土器

平成10年度の調査区から出土した土器は、ほとんどが遺構外から出土したものである。総量は段ボール箱で4箱分、総破片数351点と少ないが、縄文時代早期の貝殻文土器から近世の陶磁器まで、幅広い時代のもので出土している。これらの土器・陶磁器のほとんどは、丘陵頂部の遺跡の主体部から二次的に動いたものと思われる。これらの土器は、時代別に以下の9群に分類される。

- 第I群土器 縄文時代早期の土器
- 第II群土器 縄文時代前期の土器
- 第III群土器 縄文時代中期末葉～後期初頭の土器
- 第IV群土器 縄文時代後期の土器
- 第V群土器 縄文時代晩期の土器
- 第VI群土器 弥生時代前期の土器
- 第VII群土器 上記以外の縄文～弥生時代の土器
- 第VIII群土器 奈良～平安時代の須恵器・土師器
- 第IX群土器 室町～江戸時代の陶磁器

第I群土器 縄文時代早期の土器 (図15-1～5)

図示できたのは5点である。口縁部片や胴部破片のみで、全体の器形が分かるものはない。これらの土器の焼成は良好で、総じて硬質である。器面の色調は様々で、明るい色調のものや全体に黒い色調のものもある。胎土中に砂粒が混入するものが多い。

土器型式の違いにより、以下のように細分される。

第1類 白浜式に比定されるもの (1)

直線的に外反する口縁部片である。口縁部には筥状工具を傾けて刺突した爪形の刺突列が2列巡る。口唇部は丸く整えられ、筥状工具による刺突がみられる。胎土に砂粒の混入が認められる。焼成は、やや軟質な感じを受ける。

第2類 貝殻文が施されたもの (2・3)

貝殻復縁圧痕文が縦位に施されたもの(2)と、横位に施されたもの(3)である。

2は内湾気味に立ち上がる口縁部片で、口唇部は外傾気味に整えられている。焼成は良好で堅緻である。3は直線的に外反する胴部片で、焼成は良好である。胎土に小礫が多量に混入している。これらの型式は不明であるが、2は鳥木沢式の可能性がある。

第3類 その他早期に比定されるもの (4・5)

2点図示した。胴部下半の無文部である。4は内面に横走る条痕がみられ、焼成は良好である。4の胎土に白色の針状物質が、また、5には小礫の混入がみられる。

第II群土器 縄文時代前期の土器 (図15-6～10)

これらの土器は、調査区上部の攪乱から出土したもので、図示できたのは5点である。これらの土

器は同一固体と思われる。底部形状は不明だが、胴部から直線的に外反する円錐深鉢形と思われる。口縁部は直線的に外反する。平口縁で、口唇部は平坦に整えられている。器面全体に単節LRが横位に施文され、口縁部には篋状工具の押し引き沈線文が3条、平行に巡っている。また、胴部上半にも同様の押し引き沈線文が3～4条、平行沈線状に施される。これらの押し引き沈線文は、縄文の上に施されている。焼成は良好であるが、やや軟質な感じを受ける。器面は赤黒い色調をしている。胎土には繊維や白色の針状物質が混入している。縄文や押し引きによる器面調整が、早稲田6式に比較的類似しており、前期初頭のものと考えられる。

第Ⅲ群土器 縄文時代中期末葉～後期初頭の土器 (図15-11～17、図16-1～5)

平成10年度の調査で、出土量が多かった土器群である。調査区全域から出土し、とくにまとまって出土した地点はない。すべて口縁部か胴部破片で、全体の器形が分かるものはない。図15には口縁部片、図16には胴部片をまとめた。底部形状は不明であるが、胴部下半から上半にかけて外反し、口縁部が直立する深鉢形と思われる。口縁部は平口縁で、口唇は平坦に整えられているが、一部には図15-15のように先の丸い工具による刺突が施されるものがある。単節縄文が施されたものが多く、節が比較的大きい。また、斜位施文(縦走縄文)するものもある。図15-16は口縁部直下に縄文原体を斜めに圧痕した列がみられる。焼成は良好で、硬質である。器面は明るい色調のものが多い。

第Ⅳ群土器 縄文時代後期の土器 (図16-6・7)

第Ⅳ群に該当する土器の出土は極端に少なく、僅か2点である。

6はいわゆる貼瘤土器の口縁部破片である。平口縁で、口唇部は丸く整えられ、単節のLR縄文が回転施文されている。地文には、口唇部と同じ単節のLR縄文が横位に施文されている。口縁部直下は無文帯で、太い沈線が1本引かれている。沈線の上に貼瘤が1つみられる。焼成は良く、器面の色調は明るい。十腰内Ⅳ群～十腰内Ⅴ群に比定される。

7は外反する口縁部破片である。平口縁で、口唇部は丸く整えられている。無文で、平行沈線が2条、間隔をおいて施されている。焼成は良好で、硬質である。土器は薄く、器面の色調は明るい。焼成の具合や文様から後期の土器と判断したが、型式は不明である。

第Ⅴ群土器 縄文時代晩期の土器 (図16-8～19)

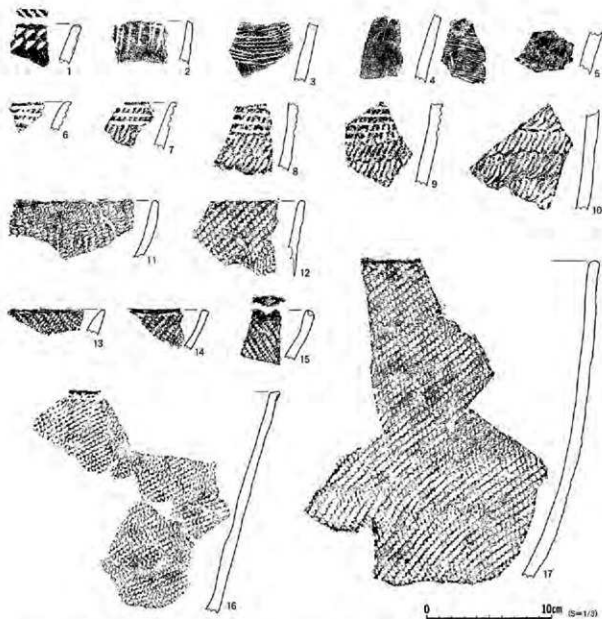
第Ⅲ群土器に次いで出土量が多かった土器群である。晩期中葉～後葉にかけての土器が多い。土器型式等の違いにより、以下のように4類に分類された。

第1類 大洞BC式に比定されるもの (8～10)

図示できたのは3点で、これらは同一固体である。深鉢形で、胴部の立ち上がりは直立に近い。口縁部の外反は弱く、口唇部は平坦に整えられている。単節のRL縄文の上に、浅く幅の広い沈線が2条1対に施され、胴部では入り組み文になっている。焼成は良好で、焼き締まっている。器面は明るい色調である。

第2類 大洞C2～A式に比定されるもの (11・12)

図示できたのは口縁部片2点である。11は屈曲する口縁部を持つ鉢形である。平口縁で、口唇に



番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様・調整	内面調整	口唇	分類	備考
1	Ⅱ T-79	Ⅱ	深鉢	口縁部	爪形刺突		丸み、刺突	第1群第1層	平口縁
2	Ⅱ O-128	Ⅱ	深鉢	口縁部	貝形刺突(縦位)		外縁	第1群第2層	被伏口縁
3	Ⅱ A-107	I	深鉢	胴部	貝形刺突(横位)			第1群第2層	小砂混入
4	Ⅱ N-93	Ⅱ	深鉢	胴部	無文	朱瓶		第1群第3層	小砂混入
5	Ⅱ O-128	Ⅱ	深鉢	胴部	無文			第1群第3層	小砂混入
6	Ⅱ T-79	Ⅱ	カケラ	深鉢	口縁部	単筋L R横位施文→押引	平坦	第Ⅱ群	同一個体、平口縁
7	Ⅱ T-79	Ⅱ	カケラ	深鉢	口縁部	単筋L R横位施文→押引	ナデ	第Ⅱ群	、平口縁
8	Ⅱ T-79	Ⅱ	カケラ	深鉢	胴部	単筋L R横位施文→押引	ナデ	第Ⅱ群	*
9	Ⅱ T-79	Ⅱ	カケラ	深鉢	胴部	単筋L R横位施文→押引刺突		第Ⅱ群	*
10	Ⅱ T-79	Ⅱ	カケラ	深鉢	胴部	単筋L R横位施文	ナデ	第Ⅱ群	*
11	Ⅱ A-119	I	深鉢	口縁部	単筋R L斜位施文(縦走横文)	ナデ	丸み	第Ⅲ群	平口縁
12	Ⅱ K-121	I	深鉢	口縁部	複筋L R L横位施文	ナデ	平坦	第Ⅲ群	17と同一個体、平口縁
13	Ⅱ C-117	I	深鉢	口縁部	単筋R L横位施文	ナデ	丸み	第Ⅲ群	平口縁
14	Ⅱ V-133	V	深鉢	口縁部	単筋L R横位施文	ナデ	平坦	第Ⅲ群	図15-5と同一個体、平口縁
15	Ⅱ D-120	I	深鉢	口縁部	単筋R L横位施文		丸み、刺突	第Ⅲ群	平口縁
16	Ⅱ I-98	I	深鉢	胴上部	単筋L R→口唇直下に斜位の刺突	ナデ	平坦	第Ⅲ群	平口縁
17	Ⅱ K-121, Ⅱ N-120	I	深鉢	胴上部	複筋L R L横位施文	ナデ	平坦	第Ⅲ群	12と同一個体、平口縁

図15 遺構外出土土器(1)

は筒状工具による刺突がみられる。胴部には単節のR L縄文が施され、口縁部には3状の平行沈線が巡っている。沈線間は無文である。焼成は良好で堅緻であり、器厚は薄い。

12は別固体の口縁部片である。平口縁の鉢、若しくは深鉢形と思われる。口縁部はややまっすぐに立ち上がり、先端で折り返されている。口縁部は指でつまみ出され、やや尖った断面形状をしている。無文で、やや間隔をおいた2条の平行沈線が施されている。沈線は浅くて太い。焼成は良好で堅緻である。器面の色調は赤黒い。

第3類 大洞A式に比定されるもの (13~15)

鉢と高杯が出土している。13・14は鉢の胴部下半で、同一固体である。強く外反しながら立ち上がる。底部付近は無文になっているが、胴部上半には工字文が施されている。焼成は良好で、器面は明るい色調をしている。15は高杯の底部である。杯部は内湾して立ち上がり、脚部はハの字状に開く。杯部の外面は単節のL R縄文が、内面はミガキがみられる。脚部は内外面ともにミガキがかけられているほか、外面には彫りの浅い沈線が杯部との境と端部に施されている。また、脚部の端部には杯部と同じ縄文がみられる。焼成は良好で堅緻である。脚部の器面は明るい色調であるが、杯部は外面に煤が付着しているため、やや黒い色調にみえる。

第4類 晩期に比定されるもの (16~19)

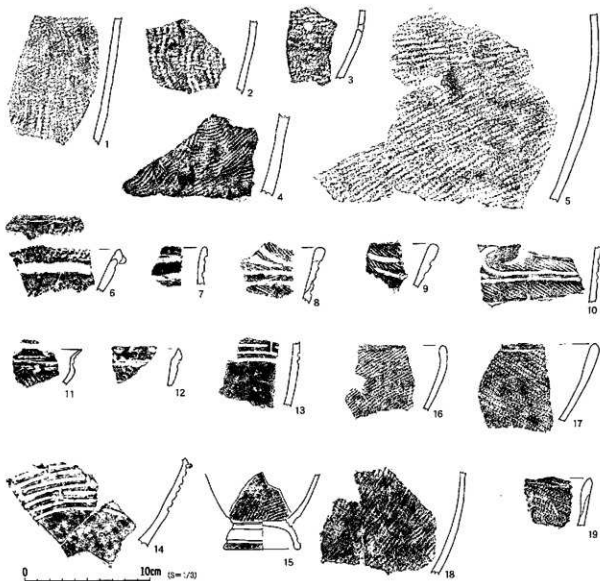
装飾性があまりない粗製土器と呼ばれるものを一括した。図示できたのは鉢の口縁部と胴部破片の4片である。底部形は不明であるが、胴部下半から上半にかけて外反し、口縁部で内側に屈曲する感じで直立する器形である。平口縁で、口縁部は肥厚する。口唇部は丸く整えられている。単節のR L縄文を施されたものが多く、一部には口縁部に沈線が引かれたものもある。焼成は良好で硬い。器面は黒い色調のものが多く、

第VI群土器 弥生時代前期の土器 (図17-1~8)

これらの土器は、調査区先端部から出土したものである。点数も少なく、出土地点も特定のグリッドに限られている。全体に器厚は薄く、焼成も良好なものである。

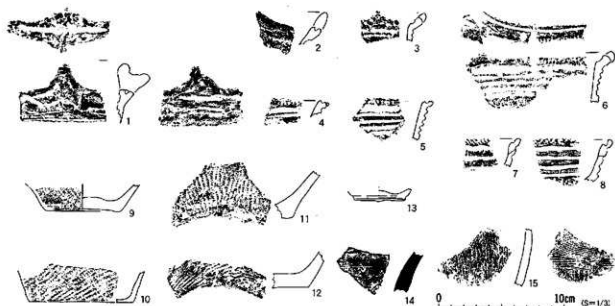
1・2は、胴部から直立気味に立ち上がる鉢形の口縁部で、同一固体である。波状口縁で、頂部に大きな突起がみられる。また、口縁部は折り返し口縁状で、口唇部に沈線が刻まれている。内外面に沈線が2条みられる。外面の沈線は狭いが、内面のものは幅が広い。焼成は良好で、器面は明るい色調をしている。時期は前期初頃と思われる。

3~8はⅢX-132グリッドから集中的に出土した土器群である。図示できたのは口縁部片6点であるが、同グリッドからは、ほかに26点の細片が出土している。胴部からまっすぐに立ち上がり、口縁端部が外側に開くように外反する。3~6は同一固体である。口縁部には山型の突起と、筒状工具による押圧がみられる。胴部には単節のR L縄文が縦走して施文され、その上部には5条の平行沈線が施されている。口縁部直下には縦に刺突されるものと単節のR L縄文が横位に施文されるものがある。内面には沈線が1条施される。胴部下半部はないが、台付鉢と思われる。焼成は良好で、器面は黒っぽい色調をしたものが多い。また、外面に煤が付着するものが多いのも特徴である。二枚橋式に比定されるものである。



番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様・調整	内装	口唇	分類	備考
1	ⅢC-117	I	深鉢	胴部	単節R.L.斜位施文(縦走縄文)			第Ⅲ群	同一個体
2	ⅢC-117	I	深鉢	胴部	単節R.L.斜位施文(縦走縄文)			第Ⅲ群	、堅くて緻密
3	ⅢV-132	I	深鉢	胴部	単節L.R.斜位施文(横走縄文)	ナデ		第Ⅲ群	補修孔
4	ⅢJ-102	I	深鉢	胴部	単節L.R.	ナデ		第Ⅲ群	
5	ⅢV-133, ⅢT-122	V・I	深鉢	胴部	単節L.R.横位施文	ナデ		第Ⅲ群	ⅢV-14と同一個体
6	ⅢC-117	I	鉢	口縁部	沈線、口縁部直下に突起、単節L.R.横位施文		丸み、L.R.横位施文	第Ⅳ群	ⅢV-14と同一個体
7	ⅢF-122	Ⅲ	鉢	口縁部	沈線		丸み	第Ⅳ群	平口縁
8	ⅢD-104	Ⅲ	深鉢	口縁部	単節R.L.横位施文→沈線		丸み	第Ⅴ群第1層	同一個体、波状口縁
9	ⅢD-103	Ⅲ	深鉢	口縁部	単節R.L.横位施文→沈線		丸み	第Ⅴ群第1層	、波状口縁
10	ⅢB-103	I	深鉢	胴部	単節R.L.横位施文→入組文			第Ⅴ群第1層	、
11	ⅢK-125	I	鉢	口縁部	単節R.L.横位施文→沈線		平坦、突起	第Ⅴ群第2層	平口縁
12	ⅢF-112	Ⅲ	深鉢	口縁部	沈線		丸み	第Ⅴ群第2層	平口縁
13	ⅢB-118	I	鉢	胴部	工字文			第Ⅴ群第3層	同一個体
14	ⅢB-120	I	鉢	胴部	工字文			第Ⅴ群第3層	、
15	ⅢX-130	I	高杯	底部	単節L.R.横位施文、脚部ミガキ、沈線	ミガキ		第Ⅴ群第3層	外面覆付層
16	ⅢE-122	I	鉢	口縁部	単節R.L.横位施文	ナデ	丸み	第Ⅴ群第4層	口唇部肥厚、平口縁
17	ⅢB-120	I	鉢	口縁部	単節R.L.横位施文→沈線	ミガキ	平坦	第Ⅴ群第4層	口唇部肥厚、平口縁
18	ⅢD-94	Ⅲ	鉢	胴部	単節R.L.横位施文			第Ⅴ群第4層	、
19	ⅢB-120	I	鉢	口縁部	単節R.L.横位施文	ナデ	内幅、突起	第Ⅴ群第4層	平口縁

図16 遺構外出土土器(2)



番号	出土地点	層位	器種	部位	外面文様・調整	内装調整	口唇	分類	備考
1	ⅢM-128	V	鉢	口縁部	沈線	沈線	沈線、突起	第VI群	同一個体、波状口縁
2	ⅢK-128	I	鉢	口縁部			平坦、沈線	第VI群	※
3	ⅢX-132	V	台付鉢	口縁部	沈線	沈線	平坦、沈線	第VI群	同一個体
4	ⅢX-132	V	台付鉢	口縁部	沈線、口縁部直下に縦キザミ	沈線	突起、沈線	第VI群	※
5	ⅢX-132	V	台付鉢	口縁部	沈線	沈線	平坦	第VI群	※
6	ⅢX-132	V	台付鉢	口縁部	単節R.L.横位施文(縦走文)・沈線、口縁部直下に縦キザミ	沈線	平坦、突起	第VI群	※、内面煤付著
7	ⅢT-125	I	台付鉢	口縁部	単節R.L.横位施文→沈線	沈線	平坦	第VI群	
8	ⅢA-117	I	台付鉢	口縁部	沈線、単節R.L.横位施文	沈線	平坦	第VI群	
9	ⅢO-128	Ⅱ	深鉢	底部	単節R.L.横位施文			第VII群	上底気味
10	ⅢA-125	I	深鉢	底部	単節L.R.横位施文			第VII群	
11	ⅢH-126	I	深鉢	底部	単節R.L.斜位施文(縦走縄文)			第VII群	
12	ⅢG-124	I	深鉢	底部	単節L.R.横位施文			第VII群	
13	表面採集		深鉢	底部	単節L.R.横位施文→沈線			第VII群	
14	ⅢK-125	I	甕	胴部	ロクロ	ナデ		第VII群	外面自然釉、須恵器
15	ⅢF 112	Ⅲ	甕	胴部	ハケメ	ハケメ		第VII群	土師器

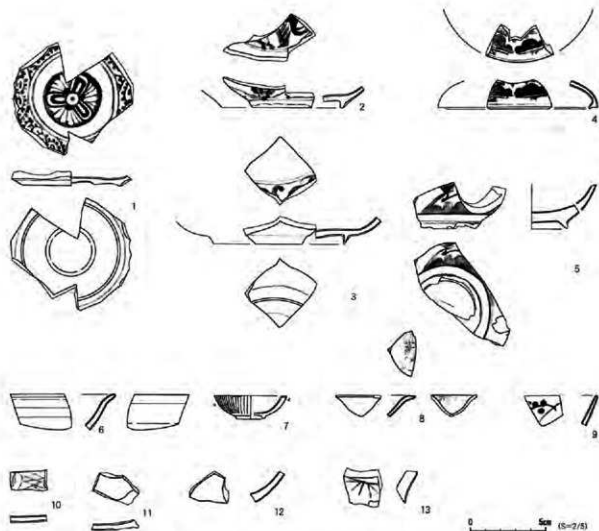
図17 遺構外出土土器 (3)

第VII群土器 上記以外の縄文～弥生時代の土器 (図17-9～13)

時期を特定しづらい底部片をまとめた。11は縦走縄文であるが、単節の縄文を横位施文したものが多く、9は上げ底気味である。13は単節L.Rの縄文を横位に施文した後に、浅い沈線を1条巡らせている。

第VIII群土器 奈良～平安時代の須恵器・土師器 (図17-14・15)

須恵器と土師器が出土しているが、数が少なく、また、破片であるため、ここでまとめて述べる。須恵器は甕の頸部破片と思われるものが1点出土している。内面にはナデ調整が、外面にはロクロ調整と自然釉がみられる。小片のため時期不明であるが、平成9年度の出土例や五所川原窯跡群の操業時期を考慮すると9世紀後半～10世紀第二四半期ごろであろうか。土師器は図示できたのは胴部破片1点である。内外面にハケメ調整がみられる。平成9年度の出土例に照らし合わせて、8世紀中葉～木葉の時期を考えたい



番号	出土地点	層位	種別	器種	口径	底径	器高	釉の色調	素地の色調	時代・年代	備考
1	II Y-90	I	肥前染付	皿	-	8.6	(1.0)	灰白色(10Y 8/1)	灰白色(2.5Y 8/1)	19世紀	肥前V期
2	II E-105	II	染付(明)	皿	-	(8.2)	(2.0)	灰白色(5Y 7/1)	灰白色(2.5Y 8/1)	16世紀前半	2次焼成
3	II M-120	I	肥前染付	皿	-	(8.8)	(1.8)	灰白色(10Y 8/1)	灰白色(5Y 8/1)	18世紀後半	肥前IV期
4	表面採集		肥前染付	段重皿(10.6)	-	(1.9)		灰白色(2.5Y 8/1)	灰白色(2.5Y 8/1)	19世紀	肥前V期
5	表面採集		肥前染付	碗	-	(4.8)	(3.1)	灰白色(10Y 8/1)	灰白色(10Y R 8/1)	18世紀	肥前IV期
6	II P-88	I	白磁(明)	碗反置	-	(2.4)		灰白色(N-8)	灰白色(5Y 8/1)	16世紀前半	
7	II G-II-128	I	肥前白磁	紅皿	(5.0)	(1.8)	(1.5)	灰白色(5Y 8/1)	灰白色(2.5Y 8/1)	18世紀後半	
8	II H-107	II	肥前染付	皿	-	(1.4)		灰白色(5Y 8/1)	灰白色(5Y 8/1)	18世紀後半	
9	II C-107	II	肥前染付	碗	-	(2.0)		灰白色(10Y 8/1)	灰白色(2.5Y 8/1)	18世紀	肥前IV期
10	II H-107	II	肥前赤絵	皿	-	(0.4)		灰白色(5Y 7/1)	灰白色(10Y R 7/1)	17世紀か	格子柄
11	II D-113	I	肥前白磁	皿	-	(0.7)		細砂(9C Y 8/1)	灰白色(5Y 8/1)	17世紀か	
12	表面採集		肥前染付	鉢	-	(2.1)		灰白色(N-8)	灰白色(2.5Y 8/1)	19世紀	肥前V期
13	II K-125	I	肥前染付	瓶	-	(2.5)		灰白色(10Y 7/1)	灰白色(10Y 7/1)	18世紀	肥前IV期, 焼き損じ

図18 遺構外出土土器(4)

第IX群土器 室町〜江戸時代の陶磁器 (図18・図19)

平成10年度調査区から出土した陶磁器の点数は57点である。調査区から散発的に出土している。時代幅は中世〜近・現代までと幅が広い。ここでは、近世の陶磁器にも注目し、報告することにした。まず、舶載陶磁器と国産陶磁器の2類に分類し、それぞれ器種ごとに特徴を述べる。なお、年代は観察表に記載する。

船載陶磁器 (図18-2・6)**染付(明染付)** (図18-2)

皿の底部である。焼成は硬質で、素地、釉ともに灰白色で、呉須の色調は青灰色である。外面には玉取獅子文が、内面には牡丹唐草文が描かれている。高台はやや内傾して削られ、高台内面と皿付けは露胎になっている。底径は推定で8.2cmある。

白磁(明白磁) (図18-6)

端反皿の口縁部である。焼成は硬質で、素地、釉ともに灰白色で、釉は光沢に富んでいる。やや直立しながら立ち上がり、口縁部で急激に外反する。

国産陶磁器 (図18-1・3~5, 7~13, 図19-1~15)

陶磁器には肥前、瀬戸美濃、志野、唐津のほか、大塚相馬、小久慈といった近世の地方窯の製品も認められる。

染付(肥前染付) (図18-1・3~5・8・9・12・13)

近世、とくに江戸時代後半のものが多い。器種には、皿・碗・瓶・蓋・鉢がある。総じて焼成は硬質である。素地、釉ともに灰白色で、光沢に富むものが多い。呉須の色調は青灰色である。

1・3・8は皿である。1は底部片で、見込みには三方割銀杏文が、周辺には無文帯を置いて蛸唐草文を配している。外面には圏線が巡る。高台は蛇の目凹形高台で、底径は8.6cmである。3も底部片で、内面に描かれているのは唐草文と思われる。外面には高台付近に圏線がみられる。底径は推定で8.8cmある。8は端反皿の口縁部片で、口縁外面に圏線が、また、内面に四方棒文がみられる。

4は段重の蓋である。外面に松をあしらった文様がみられる。口唇部は露胎になっており、口径は推定で10.6cmある。

5・9は碗である。5は底部で、外面には梅木文と雪の輪文が描かれている。高台内の銘は読みとれなかった。器厚は厚く、底部から強く内湾して立ち上がる。底径は推定で4.8cmである。9は口縁部で、外面に花卉文がみられる。器厚は薄く、直立気味に立ち上がる器形である。

12は鉢の胴部である。底部から胴部への立ち上がる部位で、文様がない。

13は瓶の胴部である。外面に草文が描かれている。焼き損じて、他に比べて胎土はやや軟質である。

赤絵(肥前赤絵) (図18-10)

皿の胴部と思われる。焼成は硬質である。素地、釉の色調はともに灰白色で、内面に格子模様が描かれているが、剥落が激しく、指で擦ると消えてしまう。

青白磁(肥前青白磁) (図18-11)

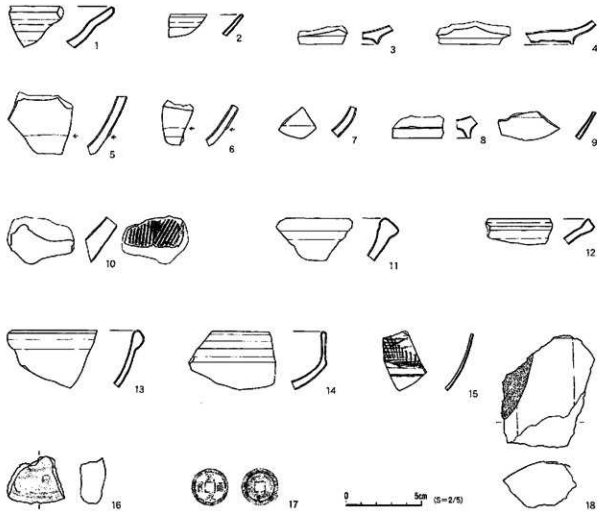
皿の胴部破片である。素地は灰白色で、釉は明緑灰色である。釉は薄く、貫入の発達も弱い。

白磁(肥前白磁) (図18-7)

紅皿が1点出土している。焼成は硬質で、素地、釉ともに灰白色に発色している。型押し成形で、外面に貝の文様をかたどった細い沈線状の窪みがみられる。内面は全体に施釉されているが、外面はほとんどが露胎になっている。口径は推定で5.0cm、底径も推定で1.8cmである。

志野 (図19-4)

皿の底部片が1点出土している。いわゆる無地志野とみられる。焼成は硬質で、素地は橙~浅黄橙



番号	出土地点	層位	種類	器種	口径	径徑	器高	釉の色調	素地の色調	時期・年代	備考
1	ⅡX-115	I	唐津	飯鉢正	-	-	(2.7)	灰色(5Y6/1)	褐色(10YR6/1)	17世紀前半	
2	ⅢF-125	I	瀬戸美濃	皿	-	-	(1.5)	紺青(7.5Y7/2)	灰白色(2.5YR8/1)	16世紀中葉	大窯Ⅱ～Ⅲ期
3	ⅡK-100	I	瀬戸美濃	皿	-	-	(1.2)	靑釉(7.5YR3/4)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	16世紀中頃	大窯Ⅱ～Ⅲ期
4	ⅡI-125	I	志野	皿	-	-	(1.5)	灰白色(5Y7/1)	藍色～靑色(7.5YR7/6～8/3)	15世紀末～17世紀初	高台内に重む焼きの痕跡
5	ⅢE-109	I	瀬戸美濃	天目鉢	-	-	(3.9)	黒色(N2)	明褐色(5YR7/1)	15～16世紀	
6	ⅢE-96	Ⅱ	瀬戸美濃	天目鉢	-	-	(2.8)	灰色(N-4)	褐色(10YR6/1)	15～16世紀	2次焼成
7	ⅢE-96	Ⅱ	瀬戸美濃	天目鉢	-	-	(2.1)	靑釉(7.5YR2/3)	灰白色(10YR8/1)	18世紀中葉～後葉	内面は灰白色(7.5Y8/2)
8	ⅢD-106	I	瀬戸美濃	天目鉢	-	-	(1.5)	赤褐色(7.5YR2/3)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	18世紀中葉～後葉	内面は灰白色(7.5Y8/2)
9	ⅢA-100	I	肥前系	皿	-	-	(1.9)	赤褐色(5YR5/2)	褐色(10YR6/1)	16世紀	内面は黄褐色(5B4/1)
10	ⅢY-80	I	瀬戸美濃	湯鉢	-	-	(3.1)	灰色(N5)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	16世紀	裏面に内面は赤褐色(10YR4/1)
11	ⅢE-105	Ⅱ	瀬戸美濃	湯鉢	-	-	(2.8)	靑釉(7.5YR3/4)	褐色(10YR6/1)	18世紀後半	裏面に内面は赤褐色(10YR4/1)
12	ⅢI-104	Ⅱ	瀬戸美濃	湯鉢	-	-	(1.7)	靑釉(7.5YR3/4)	褐色(10YR5/1)	18世紀後半	裏面に内面は赤褐色(10YR4/1)
13	ⅢA-117	I	小久慈	鉢	-	-	(3.8)	灰白色(5Y7/2)	褐色(10YR5/1)	19世紀前半	
14	ⅢI-125	I	大塚相馬	鉢	-	-	(3.8)	灰白色(5Y7/2)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	18世紀後半	
15	ⅢY-97	I	大塚相馬	土瓶	-	-	(3.8)	灰白色(5Y8/1)	灰白色(10YR7/1)	19世紀末～20世紀初	

金銅製品観察表

No.	出土地点	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
16	ⅡW-75	I	鉄滓	(3.1)	(3.8)	(1.7)	(17.9)	祝動滓

古銭観察表

No.	出土地点	層位	種類	直径 (mm)	重さ (g)	外縁厚 (mm)	外縁幅 (mm)	備考
17	ⅢV-133	Ⅱ	寛永通寶	24.5	2.4	1.1	2.5	新貨水

土製品観察表

No.	出土地点	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
18	ⅢF-115	Ⅱ	羽口	(7.5)	(6.2)	(3.0)	(100.0)	

図19 遺構外出土器(5)

色である。釉はやや厚く光沢のある灰白色に発色し、貫入がみられる。高台の断面は「V」字状に近く、また、内面には重ね焼きのあとがみられる。

瀬戸・美濃 (図19-2・3・5~8・10~12)

皿、播り鉢、碗、天目茶碗が出土している。

皿(2・3)は灰釉が施されたもので、口縁部片と底部が1点ずつ出土した。焼成はともに硬質である。素地は、口縁部片がにぶい黄橙色で底部が灰白色、釉は暗褐色と灰オリーブ色に発色した灰釉が施釉されている。ともに貫入が顕著であるが、底部の方が発色はよく、高台際に釉溜まりがみられる。底部は削り出し高台とみられる。

播り鉢(10~12)は鉄釉が施されたもので、胴部片1点と口縁部片2点が出土した。胴部片は底部に近い部位である。焼成は硬質で、素地は浅黄橙色をしている。釉は、外面が灰色、内面は褐灰色に発色している。卸目の単位は観察できる範囲で8条で、単位同士は離れている。口縁部片は直線的に外反するが、上端が外側に張り出すものと、張り出さないものがある。焼成はともに硬質で、素地は褐灰色、釉は暗褐色に発色している。

碗(7・8)はいわゆる腰錆碗が2点出土している。胴部片と底部片で、同一固体と思われる。焼成は硬質である。内面には灰白色の灰釉が、外面には極暗褐色の鉄釉が施されている。ともに光沢に富み、内面の灰釉には貫入がみられる。高台内にも鉄釉が施されているが、量付けは露胎になっている。

天目茶碗(5・6)は胴部片が2点出土した。焼成は硬質で、素地は褐灰色~明褐色である。釉は灰色と黒色の鉄釉である。外面の腰部は露胎になっている。6は二次焼成を受けている。

唐津 (図19-1)

腰折皿の口縁部片が一点出土した。焼成は堅緻である。素地は褐灰色に、釉は灰色に発色し、光沢に富んでいる。

肥前系の陶器 (図19-9)

銅緑釉を施された皿が1点出土している。焼成は硬質で、素地は褐灰色である。釉は、内面が暗青灰色、外面が灰褐色に発色し、光沢に富んでいる。器厚は薄い。

大塚相馬 (図19-14・15)

鉢と土瓶が出土している。鉢(14)は底部から胴部まで内湾し、胴部上半から直立して立ち上がる。口縁部の断面は丸い。焼成は硬質で、素地は浅黄橙色、釉は灰白色である。土瓶(15)は胴部破片で、焼成は硬質である。素地は灰白色で、外面には色絵山水文が描かれている。器厚は極めて薄い。

小久慈 (図19-13)

鉢の口縁部が1点出土している。やや直立気味に立ち上がる口縁で、口縁端部には凸帯が付けられている。口縁部の断面は丸い。素地は褐灰色で、灰白色に発色する白濁釉が全体に施されている。

その他の出土遺物 (図19-16~18)

羽口、鉄滓、古銭が各一点出土している。羽口(18)は、溶着滓が付着した先端部片である。鉄滓(16)は、流動滓と思われる破片である。古銭(17)は、寛永通寶で、書体から新寛永とみられる。(平山)

2 石器

石器は剥片石器12点、礫石器9点の総数21点が出土した。剥片石器は石鏃、石匙、石筥、削器・搔器、石核、剥片などで、石材は全て珪質頁岩である。礫石器は、石錘、敲石、磨石、礮器などが出土しており、石材は安山岩、砂岩、輝緑岩などである。

石鏃 (図20-1・2)

2点の出土である。1は凹基無茎鏃で、抉り部分の剥離は本石器の中で最も古く、この部分から調整を施したものと考えられる。2は有茎鏃である。2点ともに両面調整で、裏面に主要剥離面を残す。

石匙 (図20-3)

1点の出土で、縦型である。主要剥離面には顕著な使用光沢は見られないが、両側縁の縁辺には微細剥離痕が見られる。この微細剥離の稜は潰れて丸みを帯びており、使用によるものと考えられる。片面調整であるが、つまみ部及び打点付近のみ両面から調整が施される。打点は除去されている。

石筥 (図20-4)

1点の出土である。両面からの周縁加工で、表面に礫面を残す。刃部は片刃で、形状は偏刃状である。使用痕は顕著ではないが、刃部裏面の微細剥離痕は稜が潰れて丸みを帯びている。

削器・搔器類 (図20-5～9)

4点の出土である。5は両面加工で、表面は一侧縁に連続する剥離を施し、主要剥離面は打点付近と素材の末端に調整剥離が施される。打点の除去と螺番剥離(ヒンジフラクチャー)になっている末端の加工を意図したものと思われる。7は片面調整で素材の一侧縁に連続する剥離が施される。6、8、9は素材の側縁に連続する微細剥離が施されるものである。このうち、6は礫面を残している。

石核 (図20-10)

1点の出土である。大きさ53×44×30(mm)で、礫面を多く残している。おそらく原礫も小型であったと考えられる。4回にわたり打割られているが、石器として使用できる剥片は最後に剥離された1枚だけであり、あとは、打面調整のための剥離痕と考えられる。

石錘 (図21-1・2)

2点の出土で、石材は安山岩である。2点ともに抉りは、素材の長軸上に両面から施されている。

磨石 (図21-3・4)

2点の出土で、石材は砂岩である。3は厚みのある扁平な礫を素材とし、その側面を使用している。4は三角柱状磨石と呼ばれるものである。

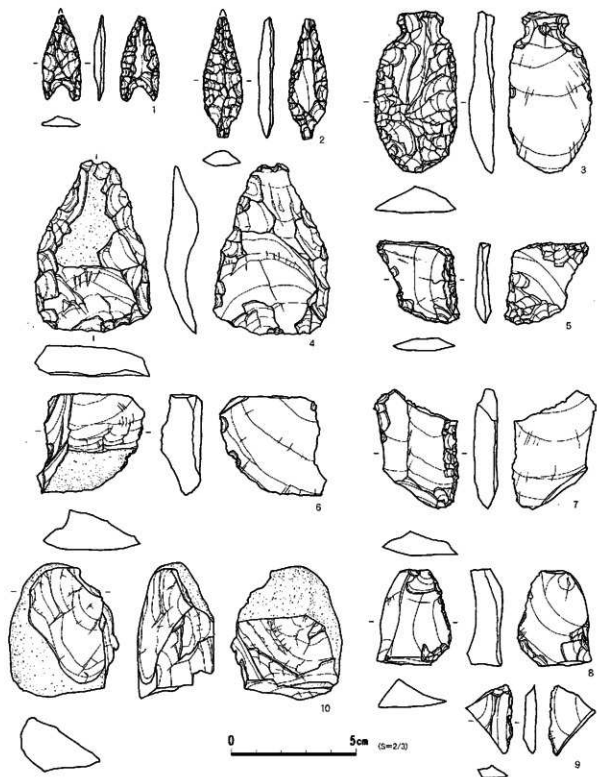
敲石 (図21-5～7)

3点の出土である。5は器体のほぼ中央に凹部を持つもので、石材は砂岩である。6は扁平な礫を素材とし、その端部を使用するもので、石材は砂岩である。7はほぼ中央の両面に浅い敲打痕を持つもので、石材は安山岩である。

礮器 (図21-8・9)

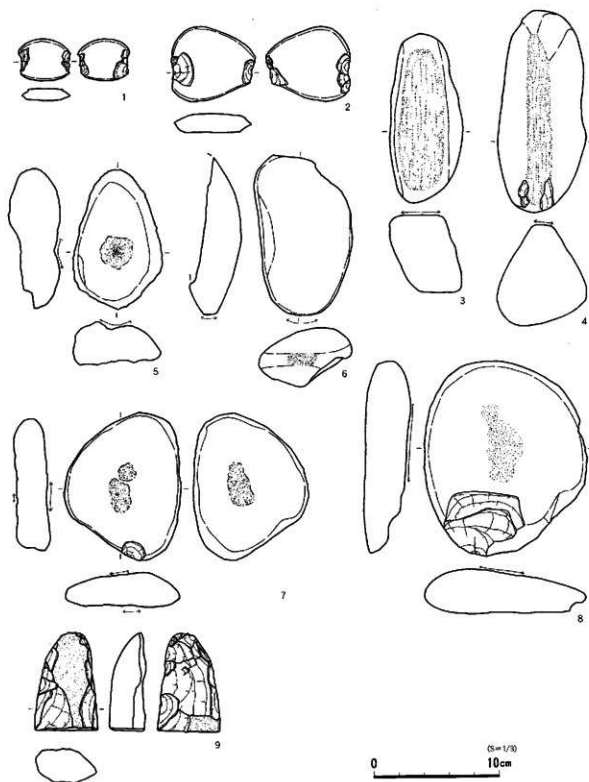
2点の出土である。8は端部が剥離されるが、稜が潰れて丸みを帯びていることから、この剥離は使用によるものと考えられる。石材は安山岩である。9は破損品である。礮器に分類してはいるが、石斧類の基部である。推定される石斧は、残存する大きさが長さ77mm、幅50mmに及ぶことから、大型の打製石斧と思われる。石材は輝緑岩である。

(小山)



番号	種類	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
1	石 鏃	Ⅲ F-116	IV層	34	16	4	1.8	珪質灰岩	
2	石 鏃	Ⅲ F-130	I層	48	16	6	4.0	珪質灰岩	
3	石 鏃	Ⅲ F-133	I層	64	33	10	17.6	珪質灰岩	
4	石 鏃	Ⅲ F-136	I層	68	46	17	43.6	珪質灰岩	
5	削片・擦器 I	Ⅲ H-126	I層	35	33	6	4.9	珪質灰岩	
6	削片・擦器 II	Ⅲ K-135	I層	39	43	16	20.5	珪質灰岩	
7	削片・擦器 II	Ⅲ O-128	Ⅱ層	47	33	9	12.4	珪質灰岩	
8	削片・擦器 II	Ⅲ G-120	I層	38	29	14	11.6	珪質灰岩	
9	削片・擦器 II	Ⅲ F-119	I層	27	18	5	5.9	珪質灰岩	
10	石 核	Ⅲ K-128	I層	53	44	30	75.4	珪質灰岩	

図20 遺構外出土石器 (1)



番号	器種	出土地点	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
1	石錘	ⅡR-108	I層	32	40	10	18.1	安山岩	
2	石錘	ⅡR-82	I層	58	68	15	82.4	安山岩	
3	磨石	ⅡM-128	IV層	134	72	58	748.4	砂岩	
4	磨石	ⅡT-79	I層	159	71	81	983.3	砂岩	
5	磨石	表塚		112	71	42	375.2	砂岩	
6	磨石	ⅡT-79	I層	127	78	(41)	446.8	砂岩	
7	磨石	ⅡT-91	I層	117	92	30	375.7	安山岩	
8	磨石	ⅡI-103	IV層	165	131	36	113.2	安山岩	
9	磨石	ⅡH-116	IV層	(77)	(50)	29	142.9	輝綠岩	

図21 遺構外出土石器 (2)

第4章 円形の落とし穴について

青森県の落とし穴は、溝状と円形のものが出されており、その割合は8:2で溝状の方が多い。樺引遺跡でも2ヶ年にわたる調査で、両形態の落とし穴が出されている。内訳は、溝状が45基(平成9年度39基・10年度6基)、円形が28基(平成9年度20基・10年度8基)であり、溝状の方が多い。しかし、検出された円形の落とし穴は、県内でも例の少ない配列が組まれるもので、平成9年度に丘陵頂部の平坦面に13基連続して並んで検出された。円形の落とし穴列が出されている事例は、県内では他に八戸市鶴窪遺跡、三沢市小田内沼(1)遺跡、十和田市寺山(3)遺跡などで報告されているのみである。また、平成10年度の調査では、円形の落とし穴の覆土に中振浮石ちうぶらうじが堆積するのが検出されたことから、ここでは、円形の落とし穴について若干の考察を加えたい。

1 形態・規模・小穴

円形の落とし穴の形態は、平面形がほぼ円形で、断面形は円筒形である。平成9年度に丘陵頂部の平坦面で検出された落とし穴は、検出面の開口部径・底面径・深さにおいて、まとまりを見せる。開口部径は、ほぼ1.4m前後、底面規模は概ね70~80cm、深さは1.3~1.4mである。

平成10年度に検出されたものは、平成9年度のものより若干ばらつきが見られる。検出面の開口部径は小規模の1.1、1.2m前後が4基、中規模の1.6mが1基、大規模の1.9~2.2mが3基である。底面径も同様に0.8~1.2mの範囲にばらついている。深さは、概ね1.1m前後にまとまるが、40cmや70cmと浅いものも見られる。これは、遺構確認時のレベル差を反映しているものと考えられる。

底面には1~7個の小穴を持つものがほとんどで、小穴の径は概ね10cm前後である。小穴には掘り方を持つものもあるが、9:1の割合で掘り方のないものの方が多い。

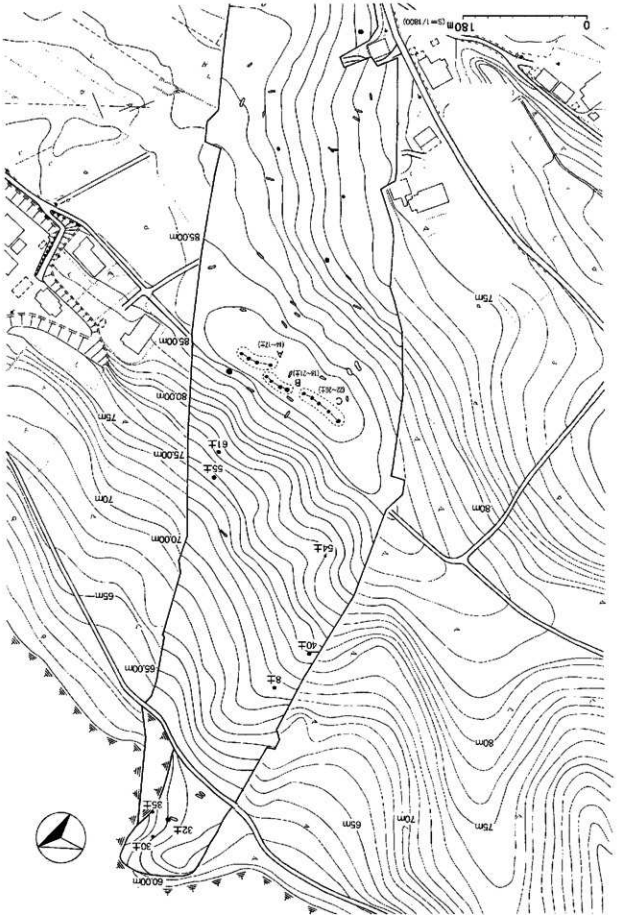
平成9年度円形落とし穴列内土坑観察表

遺構番号	出土位置	上場規模(cm)	下場規模(cm)	深さ(cm)	小穴	その他
14	ⅡQ-78・79	128	67	139	1本(深さ7cm)	Aグループ
15	ⅡQ-79・80	158	76	131	3本(深さ14cm)	Aグループ
16	ⅡP-80	130	86	127	2本(深さ10cm)	Aグループ
17	ⅡN・O-81	132	70	129	2本(深さ14cm)	Aグループ
18	ⅡO・P-82	110	73	120	1本(深さ7cm)	Bグループ
19	ⅡO-83	124	76	121	1本(深さ10cm)	Bグループ
20	ⅡN・O-84	168	102	126	2本(深さ9cm)	Bグループ
21	ⅡM・N-84	201	148	129	2本(深さ9cm)	Bグループ
22	ⅡL-85・86	143	62	138	2本(深さ8cm)	Cグループ
23	ⅡK-86・87	144	70	141	1本(深さ4cm)	Cグループ
24	ⅡK-87・88	145	65	141	2本(深さ14cm)	Cグループ
25	ⅡJ-89	153	66	139		Cグループ
26	ⅡI・J-90	180	91	145		Cグループ

平成10年度円形落とし穴観察表

遺構番号	出土位置	上場規模(cm)	下場規模(cm)	深さ(cm)	小穴	その他
8	ⅢB-118	160	90	90	6本(深さ20cm)	
30	ⅢV-130	120	80	130		中振浮石堆積
32	ⅢT-128・129	220	130	110		中振浮石堆積
35	ⅢU-127	110	70	110		中振浮石堆積
40	ⅡW-115・116	190	120	110	8本(深さ25cm)	
54	ⅡQ-105・106	130	110	40	11本(深さ10cm)	小穴に掘り方あり
55	ⅡZ-92	190	120	110		
61	ⅡY-89	170	120	70		

図22 棚引遺跡の落し穴配置



2 機能

八戸市櫛引遺跡では、前述のような形態をした土坑が埋没沢をまたぐ様に規則的に配列されており、これらの土坑は形態・規模・配列などから落とし穴であるとしている。また、底面にみられる小穴は、土層観察の結果、先端を尖らせた逆茂木状の杭を埋め込んだ跡であることが判明した。このことから、逆茂木状の杭は、動物の動きを制限するためのものとして、落とし穴の認定理由に挙げている。また、小穴を持たないものに関しても、形態・規模が小穴を持つものと同様であり、かつ配列の中に併存する事から落とし穴であるとしている。

櫛引遺跡で検出された土坑に関しても同様なことが言える。まず第1に、配列が組まれること、第2に、底面に小穴を持つこと、第3に覆土がすべて自然堆積であること、第4に覆土から遺物が全く出土しないことである。この4点から、円形土坑は、落とし穴として機能したものと考えられる。

3 覆土

落とし穴の覆土はすべて自然堆積で、例外なく覆土の最上部に基本層序第IV層が堆積する。平成10年度に検出された土坑には第IV層の上に中振浮石が堆積するものもある。落とし穴が埋没していくなかでの最終段階で、これらの層が堆積したと考えられる。遺物はどの土坑からも出土しなかった。

4 落とし穴の分布

青森・秋田・岩手の3県で、円形の落とし穴の分布を見ると、本県の津軽地方にはまったくみられず(注1)、秋田県でもまばらに分布するのみである。(図23)しかしながら、岩手県では全域にわたり分布している。円形の落とし穴は太平洋側に多く、日本海側には少ないという傾向が見て取れる。さらに、本県及び岩手県北から検出された落とし穴と岩手県南・秋田県から検出された落とし穴には違いが見られる。前者に多く見られるのは、円形で径10cm前後の小穴が底面に1～数本程度みられるタイプである。一方、後者に見られるのは、径が20～40cmと大きく、深い柱状穴の穴が1～2本構築されるタイプである(田村:1987)。また、径の小さい小穴を持つタイプも見られるが、この平面形は方形になるのがみられる。

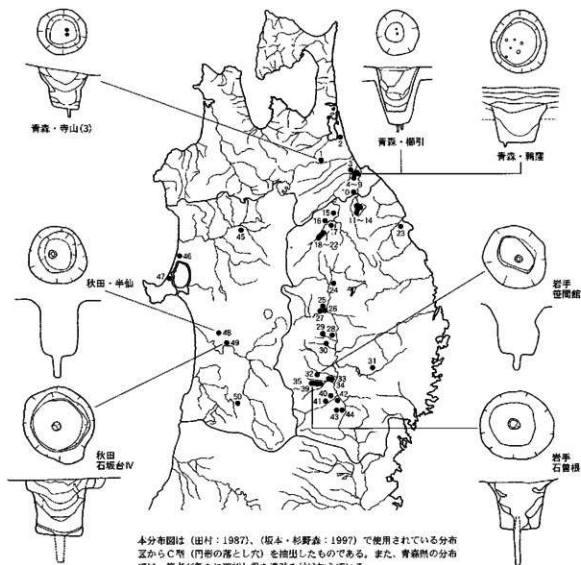
5 構築年代

構築年代は検出状況と落とし穴の分布から次のように考えられる。

検出状況では、落とし穴から遺物がまったく出土しないため、遺物による年代決定はできない。しかし、覆土の堆積状況から中振浮石降下以前に構築・廃棄されたことは確実である。中振浮石の降下年代は、南郷村畑内遺跡では、この層の直上から円筒下層a式土器(青森県教育委員会:1997)が、和田市大和田遺跡では、中振浮石層の直下から長七谷地Ⅲ群土器(青森県教育委員会:1998)が出土していることから、縄文時代前期初頭～中葉と考えられる。さらに、覆土に早期貝殻文系土器群の包含層である第IV層が堆積することから、構築時期は縄文時代早期中葉にさかのぼるものと推定される。

県内における円形の落とし穴の分布は太平洋側に限定される。この分布傾向は、縄文時代早期の遺構がある遺跡分布と一致する。早期の遺跡は主に太平洋側に分布しており、日本海側で遺構を伴う遺跡は数例しかない。このことから、円形の落とし穴の構築時期は早期であると考えられる。

このように考えると、分布のところで若干ふれた、本県及び岩手県北に見られるタイプが、秋田県・岩手県南に見られないのは、時期差を示しているとも考えられる。しかし、秋田県・岩手県南の落とし穴には時期決定できる材料がほとんどないことから、今後の資料増加を待ちたい。



本分布図は(田村:1987)。(坂本・杉野森:1997)で使用されている分布
 互からC型(円形の落とし穴)を抽出したものである。また、青森県の分布
 では、筆者が新たに確認し得た遺跡を付け加えている。

No.	遺跡名	市町村名	奥山図	文献	No.	遺跡名	市町村名	奥山図	文献	No.	遺跡名	市町村名	奥山図	文献
1	寺山(3)	十和田市	7	青埋報235集	18	飛鳥台地I	浄法寺町	11	岩文報101集	35	岩谷地蔵群	北上市	2	岩文報176集
2	小田内(1)	三沢市	5	青埋報107集	19	榑ノ木平田	浄法寺町	12	岩文報89集	36	中屋敷	北上市	1	岩文報182集
3	糖平(1)	八戸市	3	青埋報72集	20	榑平	浄法寺町	19	岩文報110集	37	法益野I	北上市	5	岩文報182集
4	長者森	八戸市	1	青埋報74集	21	五鹿I	浄法寺町	34	岩文報97集	38	八幡野II	北上市	1	岩文報183集
5	鶴窟	八戸市	15	青埋報76集	22	田余内I	浄法寺町	3	岩文報105集	39	石曾根	北上市	18	岩文報165集
6	白山平(2)	八戸市	3	青埋報83集	23	中長内	久慈市	4	市埋報10集	40	比久内沢	北上市	2	市文報36集
7	弥次郎窟	八戸市	4	青埋報128集	24	川口I	岩手町	9	黒埋報83集	41	蟹山	八ヶ岳町	41	黒埋報65集
8	棚引	八戸市	28	青埋報263集	25	葺取	滝沢村	5	村文報3集	42	東大畑	水沢市	4	黒埋報44集
9	長七谷地7	八戸市	3	八埋報8集	26	小嵐塚	盛岡市	1	小嵐塚遺跡	43	地谷地	水沢市	8	黒埋報60集
10	水吉	南郷村	4	青埋報245集	27	前九年I	盛岡市	1	岩文報35集	44	南天中	水沢市	3	黒埋報60集
11	大塚II	軽米町	15	岩文報115集	28	田頭	新波町	2	限文報35集	45	太田谷地蔵	鹿角市	3	秋教報183集
12	駒坂	軽米町	8	岩文報98集	29	栗田川	新波町	6	限文報69集	46	駒子台	八竜町	1	秋教報230集
13	巨鳥丁久保VI	軽米町	11	岩文報129集	30	西田	新波町	9	岩文報51集	47	三十刈	男鹿市	2	秋教報110集
14	水吉VI	軽米町	21	岩文報219集	31	栗田	遠野市	3	市埋報3集	48	半仙	協和町	5	秋教報180集
15	青久保	二戸市	1	岩文報118集	32	笹閉館	花巻市	23	岩文報115集	49	石坂台IV	河辺町	3	秋教報150集
16	大久保	二戸市	24	岩文報101集	33	上鬼柳I・IV	北上市	2	岩文報160-175集	50	高橋山II	羽後町	2	秋教報183集
17	飛久保I・II	二戸市	3	岩文報115集	34	成田	北上市	3	市文報64集					

図23 円形落とし穴の分布

6 立地・配置

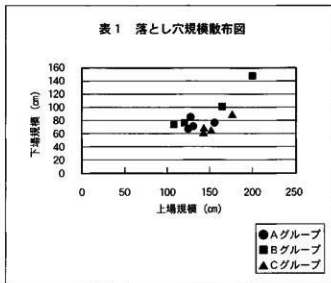
掘引遺跡の落とし穴列は丘陵頂部に13基連続して配列されている。しかし、図22の様に3グループに分かれる可能性もある。この場合、グループ間の距離はA・B間が4m、B・C間が6mである。また、グループ内の落とし穴間の距離は、Aグループで2～5m、Bグループで1.5～2m、Cグループで3～4.5mで、ほぼ等間隔で配置されている。グループの構築時期は、遺構の切り合いが無く、堆積状況がほぼ同一で、かつ、グループごとの規模を比較してみてもまとまりが見られない(表1)ことから、同時存在か、若しくは時間差がほとんどないものと考えられる。

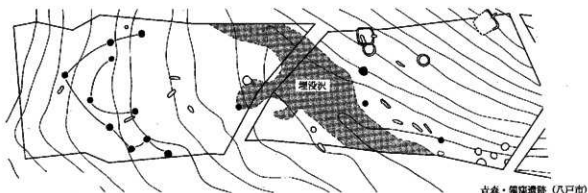
落とし穴に配列が見られる他の遺跡と比較してみる。

県内では、八戸市鶯窪遺跡で、落とし穴が埋没沢をまたぐ様に、等高線に沿って3～8基配置されている。落とし穴間の距離はおおよそ7～8mである。また、落とし穴と考えられる溝状土坑も、沢をまたぐ様に配列されている。このことから、落とし穴と沢地形は密接な関連があると思われる。三沢市小田内沼(1)遺跡は緩斜面の傾斜に直行して5基連続して検出された。最も高いところと低いところにある土坑との比高差は約2mである。落とし穴間の距離は11～14mである。周辺の地形は不明である。十和田市寺山(3)遺跡も同様に、斜面上の傾斜に直交して7基の落とし穴がみられる。落とし穴間はほぼ16～18mの等間隔で配置されている。土坑どうしの比高差は20m近くなる。周辺の地形は不明である。

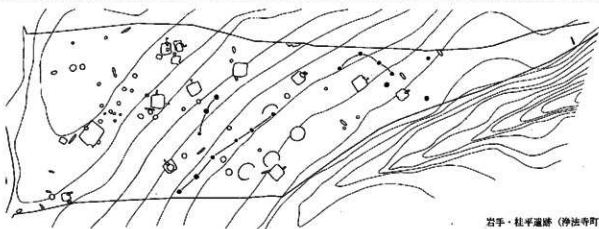
岩手県北の例で見ると、岩手町五庵I遺跡では山ぎわに、等高線に沿って、4～6基を一単位として配列されている。直線状に並ぶものと弧状になるものがある。遺構間は5mのほぼ等間隔である。また、軽米町水吉VI遺跡では、五庵I遺跡と同様に山ぎわの等高線に沿って弧状に配列される。遺構間はほとんどなく、ほぼ接している。また、浄法寺町桂平遺跡では沢筋に沿って、3～5基が等高線に沿って直線状・弧状に配列されている。遺構間の距離はほぼ等間隔である。岩手町川口I遺跡では、周辺の地形は不明であるが、平坦面に6基弧状に配列されている。遺構間の距離もほぼ等間隔である。

以上のように、落とし穴列は、沢地形や、山ぎわに沿って配列される傾向が強い。しかし、掘引遺跡の土坑列は、丘陵の頂部に落とし穴列が構築され、現在沢地になっているところからは若干離れている。地形と配列の関係で見ると、特異な感がある。しかし、調査区内には丘陵の頂部を境にして、埋没沢が南北に確認されている。埋没沢の堆積過程は、第IV層が厚く堆積していることから、草創期(第V層)には沢地形であったが、その後、徐々に第IV層が堆積し沢が完全に埋まりきったものと考えられる。この堆積過程は、土坑列内の落とし穴も同様で、覆土の最上位に第IV層が堆積する。しかし、土坑内に第IV層が堆積したときに沢がどの程度、埋没していたのかは不明である。つまり、落とし穴が機能していた時期に沢がどの程度埋没していたのかは明確ではないのである。このことから、

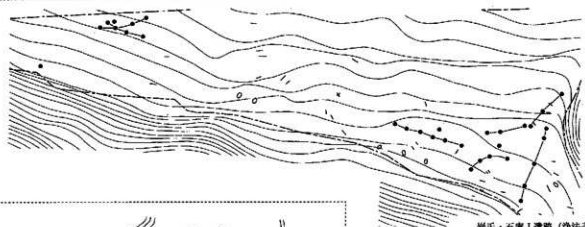




古森・備後遺跡 (八戸市)



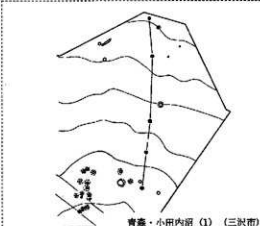
岩手・杜平遺跡 (浄法寺町)



岩手・五蔵1遺跡 (浄法寺町)



岩手・水吉IV遺跡 (萩米町)



青森・小田内宿 (1) (三沢市)

図24 円形落とし穴の配列

掘引遺跡の土坑列と立地については、埋没沢との関連から次のような2つのパターンが考えられる。

- A 沢地に集まる獣を対象とした落とし穴
- B 沢地とは関係なく、獣道に仕掛けた落とし穴

Aのパターンでは、落とし穴列と地形に関連性が見られ、狩猟方法なども説明できるが、Bのパターンでは、現時点では特異なものであり、狩猟方法・立地の理由などに不明な点が多い。今後の類例の増加を待ちたい。

地形と配列のパターンには相関性が見られず、沢地形であっても、これをまたぐ様に配列するものもあれば、沢筋に沿って配列するものもある。おそらく、相関性が見られないのは、落とし穴という性格上、機能を重視し、最も効率よく獲物をとるための配列を組んだためと考えられる。また、狩猟方法の違いという可能性も考えられる。

7 今後の課題

以上のように、円形の落とし穴について考察を加えてきたが、今後の課題として、次の点が指摘される。

- 逆茂木痕を詳細に観察し、使用状況・再利用の問題などの諸属性を明らかにする。
- 本県及び岩手県北では、縄文時代早期～前期後半における落とし穴の形態は明らかにされたが、これと、他の地域の同時期にあたる落とし穴と比較することにより、形態の地域性を明らかにする。
- 本県における円形の落とし穴は早期（下限は前期初頭）にのみ見られるもので、前期中葉以降からは、太平洋側にも日本海側にも分布しない。後続する落とし穴の形態として、溝状土坑があるが、これは、県内全域に分布し、検出数も多く落とし穴と思われる遺構の80パーセントを占めている。この傾向は、岩手・北海道においても同様である（田村:1987）。このことから、落とし穴の変遷過程や、溝状土坑に一本化されていく理由を、多角的な面から分析を試みる。
- 東京都の多摩ニュータウン遺跡では、落とし穴を掘った道具を特定するために、壁土を洗別して分析を試みており（東京都埋蔵文化財センター:1984）、これにより、掘削道具は木製のものと推定している。筆者は昨年度、掘引遺跡の報告で石筥・打製石斧は土掘りの道具と推定したが、これを、追求する意味でも道具を特定するための分析を試みる。

以上のことに留意して、今後、調査・研究を行っていきたい。

（小山）

注1 津軽地方では初の検出となる円形の落とし穴が、野木遺跡から6基検出された。6基とも底面に1個の小穴を持つ。この小穴は秋田・岩手県南に見られるような、径が大きく深くなるタイプが多く見られる。6基の落とし穴の構築時期は不明である。これらの落とし穴についての詳細は2000年3月に刊行される『野木遺跡Ⅱ』の中で報告される予定である。

第5章 まとめ

平成10年度の調査のまとめ

平成10年度の調査で検出された遺構・遺物は、つぎの通りである。

(遺構)

- ・ 竪穴住居跡 (縄文時代中期末葉～後期初頭) 1軒
- ・ 土坑 (縄文時代早期・中期末葉～後期初頭・晩期・奈良～平安時代・時期不明) 63基
- ・ 道路跡 (奈良～平安時代) 1条
- ・ 粘土跡 (時期不明) 4基
- ・ 集石跡 (時期不明) 1基

(遺物)

- ・ 土器 縄文土器 (早期前葉・前期初頭・中期末葉～後期初頭・後期後葉・晩期中葉～後葉)
弥生土器 (前期初頭)
奈良～平安時代の土師器・須恵器
室町～江戸時代の陶磁器
- ・ 石器 (縄文時代) 石鏃・石匙・削器・搔器・剥片・石錘・蔽磨器類
- ・ 羽口 (奈良～平安時代)
- ・ 鉄滓 (奈良～平安時代)
- ・ 古銭 (江戸時代) 寛永通寶

平成10年度の調査によって縄文時代中期末葉～後期初頭の住居跡が1軒検出された。この住居跡は丘陵頂部に単独で位置しているが、同時期と思われる遺構も、丘陵の北斜面(第42号土坑)と南斜面(平成9年度調査の第28号土坑)に存在する。また、この時期の土器は、平成9年度では少なかったが、平成10年度では出土土器の大半を占めていることから、この時期の生活の主体部は、住居跡の検出された丘陵頂部とその周辺の傾斜地であったことが考えられる。

平成9年度の調査で検出された遺構・遺物

平成9年度の調査で検出された遺構・遺物をまとめると、つぎのようである。

(遺構)

- ・ 竪穴住居跡 (縄文時代草創期) 2軒 (縄文時代早期) 3軒 (奈良～平安時代) 53軒
- ・ 土坑 (縄文時代草創期・早期・前期・奈良～平安時代・時期不明) 159基
- ・ 掘立柱建物跡 (奈良～平安時代) 4軒
- ・ 溝跡 (奈良～平安時代) 2条
- ・ 円形周溝 (奈良～平安時代) 2基
- ・ 道路跡 (奈良～平安時代) 1条

(遺物)

- ・ 土器 縄文土器（草創期・早期前葉・早期貝殻文・前期・中期末～後期初頭・晩期前葉
 ・ 晩期後～弥生前期前葉）
 奈良～平安時代の土師器・須恵器
 室町～江戸時代の陶磁器
- ・ 石器（縄文時代）石鏃・石錐・石匙・石筥・削器・搔器・楔形石器・磨製石斧・打製石斧
 石鏢・敲石・磨石・台石・石皿
 （奈良～平安時代）砥石
- ・ 鉄製品（奈良～江戸時代）刀子・芋引金・煙管・鋤先・鎌・棒状鉄製品ほか
- ・ 土製品（奈良～平安時代）勾玉・紡錘車・羽口
- ・ 玉類（奈良～平安時代）土製勾玉・琥珀玉・石製玉
- ・ 古銭（室町～江戸時代）洪武通寶・寛永通寶

平成9年度の調査で特筆されるのは、県内で初めての検出例となった縄文時代草創期の多縄文系土器と竪穴住居跡、3ヶ所で検出された縄文時代早期の貝殻文土器（鳥木沢式期）の捨て場、県内では類例が少ない縄文時代早期と思われる円形土坑列の検出、さらに、奈良時代の焼失家屋から出土した一括遺物である。

平成9・10年度の調査から

2ヶ年にわたる調査で、櫛引遺跡は縄文時代草創期～平安時代の遺構と遺物、また、室町～江戸時代の遺物も出土する複合遺跡であることが判明した。

計3万㎡にも及ぶ調査区の中で、縄文時代草創期・早期の時期には、東面する緩傾斜面（平成9年度調査のA区）に、中期末葉～後期初頭・晩期には丘陵頂部とその周辺（平成10年度調査区）に集落の主体が営まれており、時期ごとに選地があったことが判明した。これは、遺物の出土密度からいえることである。また、落とし穴とみられる円形土坑列や溝状土坑が検出されたことから、一帯は狩猟場としても利用されていたことも判明した。

また、奈良～平安時代には、丘陵の南～東側の緩斜面（平成9年度調査区）が生活の主体となったが、北斜面（平成10年度調査区）も一部利用されていたことが判明した。室町～江戸時代の遺構は検出されていないが、この時期の陶磁器が出土していることから、櫛引城に関連する施設が周辺にあったことを示唆している。(平山)

写 真 图 版



調査区遠景(北から)



調査区現況(北から)

写真 1 調査区現況



先端部完掘状況(南から)



調査区東側状況(北から)

写真2 調査区完掘状況



基本層序



先端部基本層序

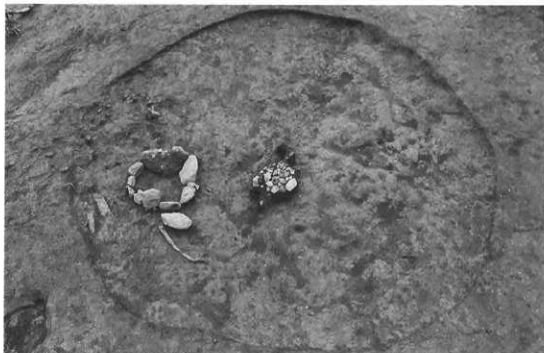
写真3 基本層序



作業風景



作業風景



完掘(西から)



土層(南西から)



炉土層(北東から)

写真5 第1号竪穴住居跡



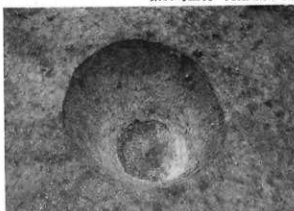
第30号土坑 土層(南から)



第30号土坑 完掘(南から)



第55号土坑 土層(東から)



第55号土坑 完掘(東から)



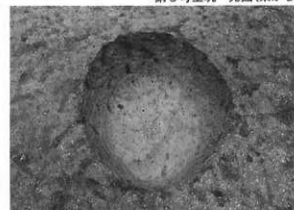
第8号土坑 土層(東から)



第8号土坑 完掘(東から)



第61号土坑 土層(東から)

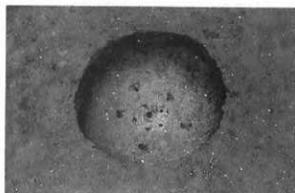


第61号土坑 完掘(東から)

写真6 土坑(1)落とし穴



第54号土坑 土層(北から)



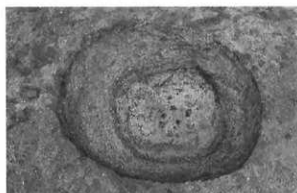
第54号土坑 完掘(北から)



第54号土坑 逆茂木土層(北から)



第54号土坑 逆茂木完掘(北から)



第40号土坑 完掘(東から)



第40号土坑 逆茂木土層(東から)



第35号土坑 土層(南から)



第32号土坑 土層(南から)

写真7 土坑(2)落とし穴



第3号土坑 土層(西から)



第3号土坑 完掘(北から)



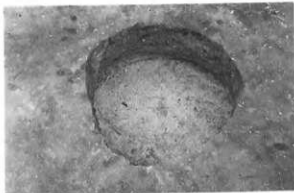
第4号土坑 土層(北から)



第4号土坑 完掘(北から)



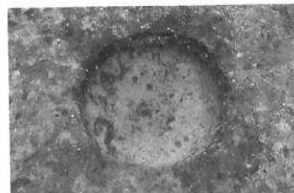
第5号土坑 土層(東から)



第5号土坑 完掘(東から)



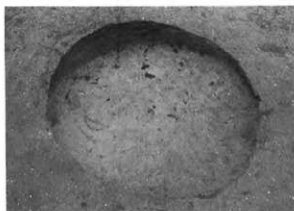
第53号土坑 土層(東から)



第53号土坑 完掘(東から)



第60号土坑 土層(東から)



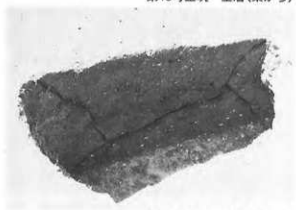
第60号土坑 完掘(東から)



第15号土坑 土層(東から)



第15号土坑 完掘(東から)



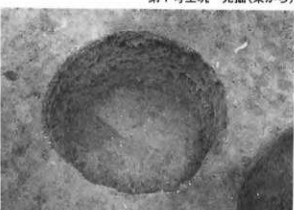
第1号土坑 土層(東から)



第1号土坑 完掘(東から)

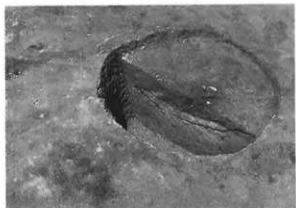


第28号土坑 土層(東から)

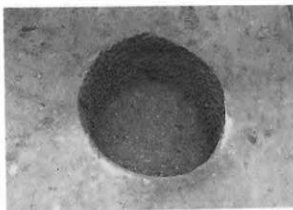


第28号土坑 完掘(東から)

写真9 土坑 (4)



第26号土坑 土層(南から)



第26号土坑 完掘(南から)



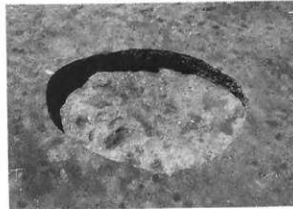
第26号土坑 遺物出土状況(東から)



第46号土坑 遺物出土状況(東から)



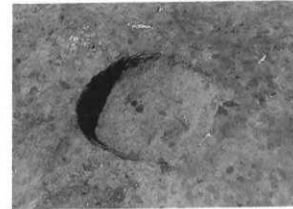
第46号土坑 土層(東から)



第43号土坑 完掘(東から)



第21号土坑 土層(東から)

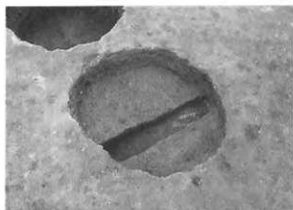


第21号土坑 完掘(東から)

写真10 土坑 (5)



第22号土坑 火山灰噴出状況(東から)



第22号土坑 完掘(東から)



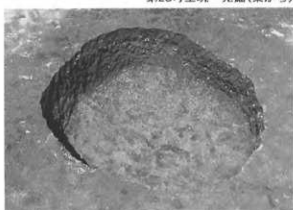
第23号土坑 土層(南から)



第23号土坑 完掘(東から)



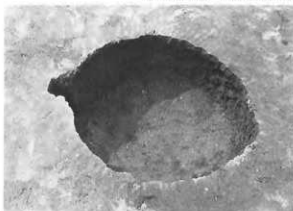
第24号土坑 土層(南から)



第24号土坑 完掘(東から)



第25号土坑 土層(南から)

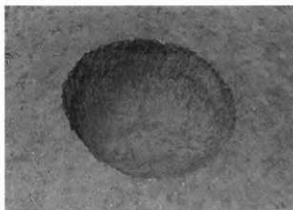


第25号土坑 完掘(南から)

写真11 土坑 (6)



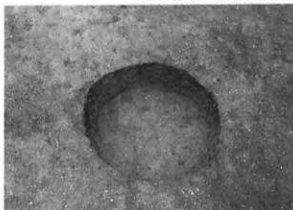
第33号土坑 土層 (南から)



第33号土坑 完掘 (南から)



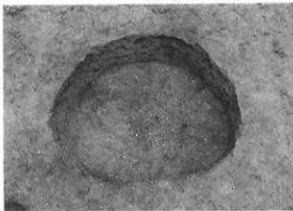
第29号土坑 土層 (南から)



第29号土坑 完掘 (南から)



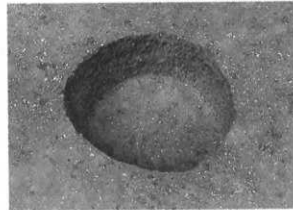
第31号土坑 土層 (南から)



第31号土坑 完掘 (南から)



第57号土坑 土層 (東から)

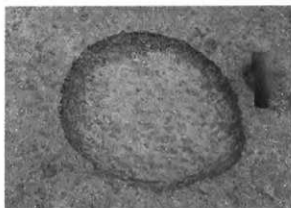


第57号土坑 完掘 (東から)

写真12 土坑 (7)



第17号土坑 土層(東から)



第17号土坑 完掘(東から)



第56号土坑 土層(東から)



第56号土坑 完掘(東から)



第11号土坑 土層(東から)



第11号土坑 完掘(東から)



第42号土坑 土層(東から)



第42号土坑 完掘(東から)

写真13 土 坑 (8)



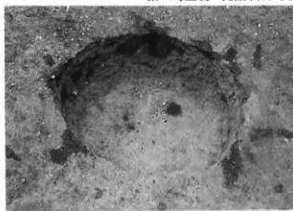
第14号土坑 土層(西から)



第14号土坑 完掘(東から)



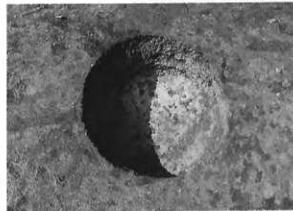
第59号土坑 土層(東から)



第59号土坑 完掘(東から)



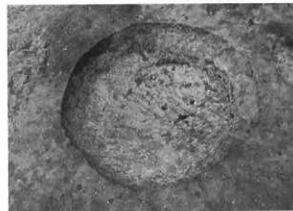
第43号土坑 土層(東から)



第43号土坑 完掘(東から)



第41号土坑 土層(東から)



第41号土坑 完掘(東から)

写真14 土坑 (9)



第6号土坑 土層(東から)



第6号土層 完掘(東から)



第39号土坑 土層(東から)



第39号土坑 完掘(東から)



第36号土坑 土層(東から)



第36号土坑 完掘(東から)



第58号土坑 完掘(北から)



第20号土坑 土層(西から)



第20号土坑 完掘(西から)



第19号土坑 土層(西から)



第19号土坑 完掘(西から)

写真16 土坑 (11)



第27号土坑 土層(西から)



第27号土坑 完掘(西から)



第66号土坑 土層(東から)



第66号土坑 完掘(東から)

写真17 土坑 (12)



第69号土坑 土層(南から)



第69号土坑 完掘(南から)

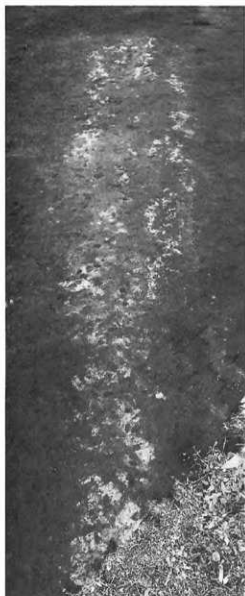


第50号土坑 土層(東から)



第50号土坑 完掘(東から)

写真18 土坑 (13)



東端 火山灰検出状況(東から)



西端 検出状況(東から)



西端土層(K-L)と調査区外に延びるくぼみ(東から)

写真19 道路跡



第1号粘土跡 土層(西から)



第3号粘土跡 土層(南から)



第4号粘土跡 土層(南東から)



集石跡(西から)

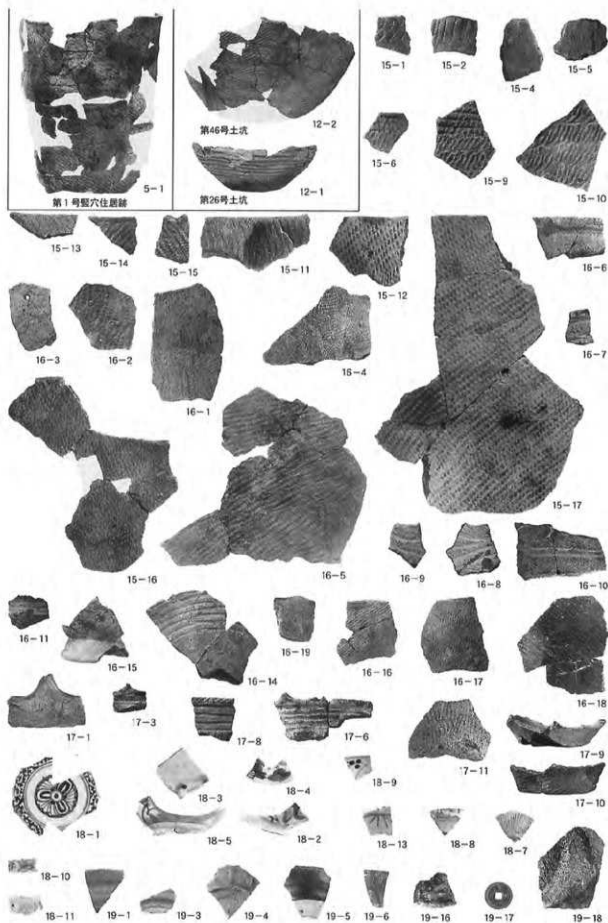


写真21 住居跡・土坑・遺構外出土遺物(土器)

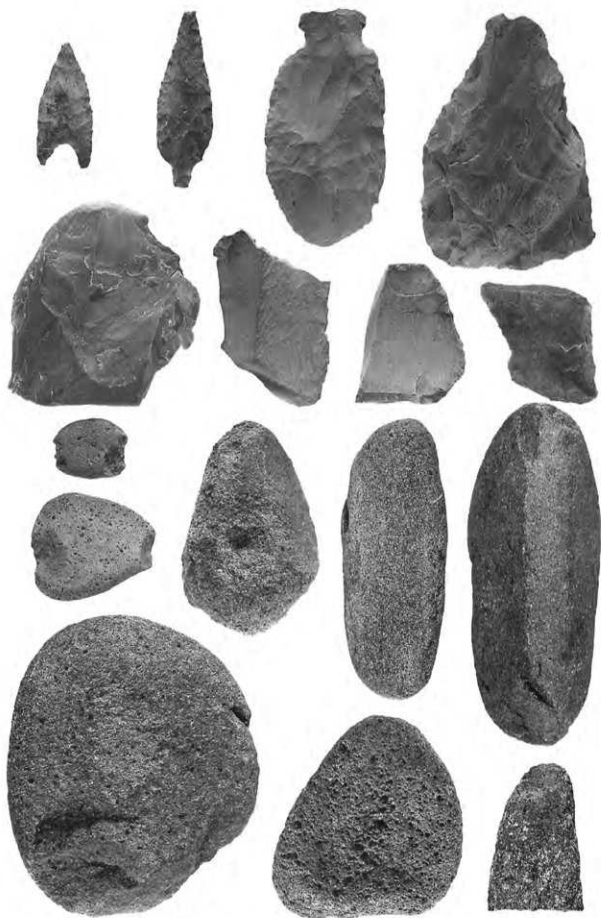


写真22 遺構外出土石器

引用・参考文献

- 青森県教育委員会：1982 『鶴窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第76集
- 青森県教育委員会：1986 『弥栄平(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第98集
- 青森県教育委員会：1987 『小田内沼(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第107集
- 青森県教育委員会：1993 『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第150集
- 青森県教育委員会：1997 『畑内遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書 第211集
- 青森県教育委員会：1998 『大和田遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第235集
- 青森県教育委員会：1998 『寺山(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第235集
- 青森県教育委員会：1999 『柳引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第263集
- 八戸市教育委員会：1986 『丹後谷地遺跡』『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
八戸市埋蔵文化財調査報告書 第15集
- 八戸市教育委員会：1988 『田面木平(1)遺跡』『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書V』
八戸市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- 秋田県教育委員会：1988 『石坂台IV遺跡』秋田県文化財調査報告書 第150集
- 秋田県教育委員会：1989 『半仙遺跡』秋田県文化財調査報告書 第180集
- 秋田県教育委員会：1989 『太田谷地館』秋田県文化財調査報告書 第183集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
：1984 『川口I遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第83集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
：1985 『五産I遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第97集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
：1986 『桂平遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第110集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
：1995 『水吉VI遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第219集
- 東京都埋蔵文化財センター
：1984 『多摩ニュータウン遺跡 No.27遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告
第5集(第1分冊)
- 大橋 康二 : 1994 『古伊万里の文様』理工学社
- 坂本真弓・杉野森淳子：1997 『青森県における陥し穴集成』『研究紀要 第2号』
青森県埋蔵文化財調査センター
- 須藤 隆 : 1998 『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』藝集堂
- 羽柴 直人 : 1994 『東北地方北部における近世陶磁器の様相』『紀要XIV』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 田村 壮一 : 1987 『陥し穴状遺構の形態と時期について』『紀要VII』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 平凡社 : 1988 『古伊万里』別冊太陽No.63

報告書抄録

ふりがな		くしびきいせき に						
書名		櫛引遺跡Ⅱ						
副書名		東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告						
巻次								
シリーズ名		青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第272集						
編著者名		平山明寿・小山浩平						
編集機関		青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地		038-0042 青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701						
発行年月日		西暦2000年2月25日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				㎡	
くしびきいせき 櫛引遺跡	あおもりけんほちのへしおおぞ 青森県八戸市大字 くしびきあざわかまふ たてゆみ 櫛引字岡前、館神 うわまち あみやぐら 上町、上矢倉 やほかあざぼんた 八幡字盆田	203	3150	40° 28' 04"	141° 26' 07"	19980427 ～ 19980831	16.400	東北縦貫自動車道 八戸線(八戸～八戸)建設 事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
櫛 引 遺 跡	集 落 跡 ・ 甌 堦	縄文	竪穴住居跡1軒		中期末葉～ 後期初頭		中振浮石降下以前に構築された円形 の落とし穴	
			土坑	10基	晩期			
			(落とし穴列)他					
		弥生			土器			
		奈良・平安	土坑	2基	土師器・須恵器			
	道跡	1条						
	時期不明	土坑	51基	陶磁器				
		粘土跡	4基					
		集石跡	1基					
		(土坑総数63基)						

青森県埋蔵文化財調査報告書272集

櫛 引 遺 跡 Ⅱ

—東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成12年2月25日
発 行 青森県教育委員会
〒030-8540 青森市新町二丁目3-1
TEL 017-722-1111 (代表)
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印 刷 株式会社 誠 工 社
〒030-0112 青森市大字八ツ役字上林78-42
TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188

本報告書は中性紙を使用しています

[紙質]表紙：レザック66クリーム 175kg 見返し：上質紙 70.5kg

本文：クリームリサイクルONE 57.5kg 写真図版：コート紙 70.5kg

[印刷]オフセット印刷：黒単色。挿図の一部は2色刷（黒色・茶色）



活彩あおり
— 輝くあおり新時代 —